

---

# 伯爵令嬢シナモン 第3部 「修道院島」

狼皮のスイーツマン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伯爵令嬢シナモン 第3部 「修道院島」

### 【Nコード】

N2349M

### 【作者名】

狼皮のスイーツマン

### 【あらすじ】

飛行船シルフィーを下船したシナモンは、シベリア鉄道でやってきたウルフレザー家宰と合流。現地で採用された執事ドロシー・ブレイヤー博士とともに日本の古跡探訪をしていた。一行が群馬県を訪れたとき、画家竹久夢二が、冤罪と思われる事件に巻き込まれ、知人の萩原朔太郎が、佐藤記者を介してレディー・シナモンに捜査を依頼した。

捜査は、意外な方向へ進展。戊辰戦争を駆け抜けた大名戦士の波

乱に満ちた生涯にからんでいく。

## 序章 1

### 【前回までの粗筋】

一九二〇年代の終わりごろ、聡明で優雅な考古学者レディー・シナモンは、ライフワークとなる研究目的から日本にむかった。

途中、上海に立ち寄り飛行船シルフィーに乗り、殺人事件に巻き込まれる。(第一部 「飛行船の殺人」)

日本へ到着し、雑誌『東京倶楽部』が、飛行船シルフィーの報道をすると、飛行船の麗人「レディー・シナモン」をもっと知りたいという膨大な数の投書が寄せられた。このため、社命によって、佐藤と中居は、英国大使館に赴き、シナモンが、探偵として、考古学者としてデビューした五年前に遡る事件をまとめたファイルを目にしたのだった。(第一部 「コンウォールの才媛」)

そして第三部が始まる。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

スイーツマン・ウルフレザー……リザード伯爵セシル家の老家宰。

『伯爵令嬢シナモン』著者。

萩原朔太郎……群馬県出身の詩人。

### 【本編】

リザード市は、イングランド島西端コンウォール半島に位置している。そこには大西洋を臨んだ岬にゴシック風の城館リザード城がある。麓の市街地から城館にたどり着くには少し坂道を登らなければならぬ。

坂道を、自転車を押した郵便配達員が行き、やがて頂きにたどりついた。頂は城壁に囲まれており、内部にはいるには、北門か南門のいずれかを通らねばならない。郵便配達員が、峻厳な北門をくぐると、意表をつくかのように華やかな薔薇園となり、そこを左に曲がったところにある北館へと歩いて行った。

リザード城の郭は、薔薇園を中心に、西にたたずむ本館と、北門・南門に隣接した南北の別館が存在する。郵便配達員が、北館にある執務室の扉をノックすると、燕尾服を着た初老の人物が現れた。

「ご機嫌よう家宰さん、お手紙ですよ」

郵便配達員はそういつて封書を初老の男に手渡すと、自転車に乗って、もときた坂道をくだっていった。初老の男は受け取った封書の宛名と差出人を指でなぞって読んでみた。

「……姫様宛だな。ほお、萩原朔太郎……あの日本の詩人か……。そういえば、探偵小説が大好きな御仁であったな。」

そうつぶやくと、家宰は杖をついて本館へと向かった。

扉を開けた途端、甘い紅茶の香りが漂ってくる。部屋は、おびただしい蔵書を収めた広間となっており、テーブルの上には、古代の壺、大理石の彫刻、青銅剣、それに開かれた数冊のノートが置かれていた。そこがその人の研究室となっている。研究室のもっとも奥には大きな事務机があり。手前にはソファとテーブルの応接セットがある。

「お手紙が届いたのですね。お疲れさまです。紅茶をいれているところでしたので、どうぞおかけください」

古風なドレスに身を包み黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人が、銀ポットから、二つのティーカップに琥珀色の液体を注いでいる。

……私はリザード伯爵セシル家の家宰スイーツマン・ウルフレザー。リザード伯爵家は、チューダー朝から続く古い家柄でしてな、他家とは少しばかり違ういい回しをすることもあるが、そのところはご容赦されたい。伯爵様を御屋形様、伯爵令嬢を姫様、そして執事長のことを家宰かさいと呼ぶのが習わし。当家には自慢の姫様がいらっしやる。

ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・リザード

十八歳。いずれはリザード伯爵家を継いで伯爵夫人となられる。職業は考古学者、あだ名は コンウォールの才媛。聡明で優雅、そしてお茶目なところもある方だ。

では、姫様の物語を始めるとしよう……。

## 【後記】

いましてがた物音がしましてね。ドアを開けてみましたところ、玄関先に大好きなモンブランのショートケーキが入った箱が置いてあり、「祝『伯爵令嬢シナモン第3部』更新」とかいたメッセージが添えられてありましたよ。（はて誰だろう？）

## 序章 2

### 前回までの粗筋

1920年代の終わりごろ、聡明で優雅な考古学者レディー・シナモンは、ライフワークとなる研究目的から日本にむかった。

途中、上海に立ち寄り飛行船シルフィーに乗り、殺人事件に巻き込まれる。(第1部 「飛行船の殺人」)

日本へ到着し、雑誌『東京倶楽部』が、飛行船シルフィーの報道をすると、飛行船の麗人「レディー・シナモン」をもっと知りたいという膨大な数の投書が寄せられた。このため、社命によって、佐藤と中居は、英国大使館に赴き、シナモンが、探偵として、考古学者としてデビューした5年前に遡る事件をまとめたファイルを目にしたのだった。(第2部 「コンウォールの才媛」)

そして……。

### 主要登場人物

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

佐藤・中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。シナモンの熱烈信奉者。

萩原朔太郎……群馬県出身の詩人。

萩原愛子……朔太郎の妹。

オットー・スコルツエニー……シナモンに関わる事件の背後に常にいる人物。「ヨーロッパ一危険な男」という異名がある。

群馬県は関東平野の北端にあり、群馬県南西部にあるのが高崎市である。高崎城址には陸軍の連隊駐屯地が置かれ、市街地はそこから東に位置する国鉄高崎駅との狭間にあつた。市街地中央には、中山道が、南北を縦断しており、路面電車は通りの真ん中を走っている。大正九年創業の洋食屋栄寿亭は、路面電車の路線沿いにたたずんでいた。

栄寿亭は、洒落つ気とは縁遠い店だ。厨房に望んだカウンターがあるだけでテーブル席などない。昼時、店に入った、雑誌『東京倶楽部』の記者佐藤とカメラマンの中居は、カウンターの最も奥に座っている外国人たちに眼がいった。

……先輩、連中、ドイツ語と英語をつかつてますね。男三人がドイツ人もしくはオーストリア人、女が中国人のようですよ。

……ドイツ語圏の連中だな。もしかして、あれが噂のスコルツエニーか？

……またまた先輩、勘ぐりすぎですよ。だいたい、スコルツエニーが

なんで日本にいるんですか。しかもここは片田舎の群馬県ですよ。

佐藤と中居は、独英の言葉を理解はしているが、離れた席であり



何をいつているのかよく訊きとれないでいた。

言葉が訊きとれない要因はほかにもあった。佐藤たちと中居たちの中間に陣取っている兄妹の存在である。まだ年若い。妹のほうは普通だが、問題なのは、黙っていたれば貴公子然としている兄のほうだった。

「兄さん、後生だから、ここで、それやるのやめて」

「――私は、怪盗伊達猫<sup>ダンディ・キャッツ</sup>、猫町の大泥棒。名探偵愛子君<sup>あいち</sup>、さあ、剣を抜いて勝負したまえ」

妹は箸を剣にみたてて振り落としてきたところを、手慣れた調子で、「にゃあ！」と受けた。

佐藤は、首をかしげて、

「この兄妹、どこかでみたことがある。あつ、そうだ。思い出した。萩原朔太郎氏と、妹の愛子嬢じゃないか！」

「朔太郎って誰すつか、先輩？」

「詩人だよ。わが社の雑誌にも作品を掲載したことがある。もっとも俺が担当したわけじゃないけれどな」

「物覚えいいっすね、先輩。尊敬しちゃうなあ」

「なんか、おまえが褒めると嫌味なんだよ」

萩原朔太郎は群馬県の開業医の家に生まれた。詩人であるが、熱烈な探偵小説ファンであった。朔太郎が怪盗伊達猫<sup>ダンディ・キャッツ</sup>と違って妹と箸で立ち回りをしていたのはそこにあるようだ。

外国人の男女四人は、食事代を支払うと、店を出てすぐにやってきた路面電車に飛び乗って行ってしまった。

佐藤たちは横目で背中を追ったが、怪しい奴らだ、と感じただけで、とくに追いかけるほどの理由もないので、そのまま詩人に名詞を渡したのだった。

## 後記

『伯爵令嬢シナモン』 開始の翌日。前日のケーキの入った箱につづいて、違う小箱がとどいた。小箱にはメッセー지가添えられていた。

……姫様がでていないぞ。

つぎに登場しなかったら、ことうだ。

パン

(おびゃっ、びっくり箱)

(《どいませども》っびく……)

## 第1章 「軍艦島」 1

### 【前回までの粗筋】

1920年代の終わりごろ、聡明で優雅な考古学者レディー・シナモンは、ライフワークとなる研究目的から日本を訪れていた。そのシナモンの取材のため、東京から、雑誌『東京倶楽部』の佐藤記者と中居カメラマンのコンビが、高崎に派遣された。二人は、そこで詩人萩原朔太郎に出会ったのだった。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

佐藤・中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。社命によりシナモンを取材中。

萩原朔太郎……群馬県出身の詩人。

竹久夢二……奔放な画家。

### 【本編】

画家は、あらゆる女性を虜にする魔性の色香があつた。竹久夢二という四十歳を少し過ぎたくらいの男だ。色白で細面、一見無害ではあるが、女性遍歴は数多い。心には翼が生えているかのようで世間の良識やら常識とやらにはしばらくはいられない。芸術家とはそういうものだ。

旅好きの夢二は、富山県に向かっていたのだが、車窓からみえた榛名山が妙に気に入って、高崎で途中下車をした。片手には画材を詰め込んだ鞆、小脇にはスケッチブックがある。人力車を頼み、絶景の場所を探し求めて移動し続けた。

穏やかな陽気のなかを彷徨<sup>さまよ</sup>う画家の双眸<sup>そうま</sup>は、名が示すように夢見るよう。人力車は、中山道<sup>なかせんどう</sup>を走り、やがて街道から横にそれた田畑の小路<sup>こみち</sup>へと移った。小路の両端には自生した花が咲いている。その人に乗せた人力車はさしずめ、花から花へと舞い移る蝶のようだった。

そうして昼頃たどりついたのは、大類村という利根川の岸边であった。

利根川の異名は、？板東太郎？である。太古の昔から大氾濫を繰り返す暴れ川で、何度か流路を変えてきた。為政者と人民は、この大河をなんとかして飼い慣らそうと、流路を変更したり、支流を人工的に設けたりとしてきた。前橋から大類村に沿ったあたりの利根川は、江戸時代に開削した人工の流路である。流れは激しく、地表は深く抉<sup>えぐ</sup>られている。そうして抉られた川岸が中州になっているところがあった。

-----  
軍艦島<sup>くわんかんじま</sup>。

画家が車夫に訊くと、車夫はそう答えた。夢二は、この中州がとも気に入った様子で、手前に軍艦島をおいて、奥に榛名山を収めた構図<sup>レイアウト</sup>となるスポットをみつけ、人力車を降り、十メートルはある絶壁となった河岸に腰をおろした。

-----  
ここを背景にして、美しい女性を座らせたら素敵な絵になるだろうなあ。

そんなことを考えながら、スケッチブック上に木炭で放物線を描くかのようなしなやかな手の動きで、大胆に、また、繊細に、描いていく。優雅な筆さばきは、絵を描くというよりもまるで、オーケ

ストラの指揮者が棒をふるっているかのようにもみえた。

夢二は、軍艦島に小さな違和感を感じた。

軍艦島は、その名の通り軍艦のような形をした細長い中州だ。周囲は絶壁となっており、鬱蒼とした木々と下草で覆われている。川沿いを走る涼風が、さわさわ、と下草の葉を揺らしたとき、小さく人の脚のようなものを、みせたのである。

夢二は画材を置き、釣り師がつかう口を降りて河原に出、浅瀬を渡った。軍艦島の上からは鳶をが垂れている。鳶にしがみつきなら崖をよじ登って、問題の場所を探してみた。

うっ、うわあああ……っ、死体だーっ。

……えっ？

少し離れたところで煙草をふかしていた車夫が、悲鳴をきいて、しばし呆然とし、それから画家のところへ駆け寄った。腰を抜かしてぶるぶる震えている画家の向こうの茂みには、若い女性が横たわっていた。

### 【後記】

「やれやれ、第1章1がおわりました。ふっっ」

よくやったっ！

「たっ、たのむから、佐藤さん、リラックスさせてくれっ」

## 第1章 「軍艦島」2

前回までの粗筋。

1920年代の終わりごろ、聡明で優雅な考古学者レディー・シナモンは、ライフワークとなる研究目的から日本を訪れていた。そのシナモンの取材のため、東京から、雑誌『東京倶楽部』の佐藤記者と中居カメラマンのコンビが、高崎に派遣された。二人は、そこで詩人萩原朔太郎に出会ったのだった。

他方、高崎郊外にある大類村には、利根川の中州である軍艦島というところがあった。そこを訪れた画家竹久夢二は、遠望する榛名山をスケッチをしているとき、偶然に、女性の遺体を発見してしまう。

### 主要登場人物

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……京都大学在籍の米国人女性考古学者。短期契約でリザード伯爵セシル家執事となり、シナモンのガイドを勤めている。

スイーツマン・ウルフレザー……リザード伯爵セシル家の老家宰。

『伯爵令嬢シナモン』の著者。

佐藤・中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。社命によりシナモンを取材中。

萩原朔太郎……群馬県出身の詩人。

竹久夢二……奔放な詩人にして画家。

長尾警部……群馬県警所属。「軍艦島事件」の担当者。

軍艦島での遺体発見の話は、報道機関は、まだ発表されていない。

早朝のことである。午前六時を回ったばかりだというのに、とても明るい。雨さえ降らねば昼はとてつもなく長くなる時期だ。

長縁の白い帽子を被った若い貴婦人レディー・シナモンが訪れていた。

貴婦人のお供をしているやはり若い女性は、ドロシー・ブレイヤー博士という。シナモンが日本に滞在している期間のみの契約ではあるがリザード伯爵家執事の肩書きがある。

軍艦島近くの断崖を二人は、手際よく、高さを測り、地層の特徴をノートにメモしていった。

ウルフレザー家宰は、仕事が一段片付いたところで二人に訊いてみた。

「いったい、この作業にはどんな意味があるのですか？」

シナモンは、一度眼を細めてから、こう説明した。

「家宰、地域の土の堆積の基本パターンを観察をしているのですよ。基本パターンの自然な地層堆積を、異常な形で壊しているのが、古代の住居跡などの遺構となります」

.....なるほどそういうものか。

事件というものは日常の状態を壊した異常事態だ。そういう点で考古学というのは事件の捜査に共通したところがある。まあ、もっとも、両分野にまたがって卓越した才能を発揮できる人というのは希であろう。家宰はそんなふう思った。

そのときだ、

……川辺に異常なところがある。気のせいならいいのだけれど。

シナモンは、軍艦島を臨む崖を降った砂の川辺をみて、異常に気づいたようだ。そして家宰と執事を川辺から退去させたのだ。

突然、素っ頓狂な訊きなれた声がした。

「姫様！ なぜここに？」

声の主は、崖から川原に下りる谷になった坂道にいた。細身で中背の男だった。雑誌『東京倶楽部』カメラマンの中居だ。横にいたのは、日本人にしては長身でがっしりした体躯をしている記者の佐藤である。

記者とカメラマンの後ろから、警察の一団が割って入ってきた。

「現場を荒らさないでくれて感謝します。私は群馬県警の長尾といえます。その中州で女性の遺体が発見されましたね。いま調べているところなのですよ」

そういつてから、

「……ああ、外国の方だった。佐藤さん、英語が堪能だったね、通訳頼むよ」

と付け加えた。佐藤は、ふっ、と笑って、

「日本語が堪能な方です。ふつうにお話になっても大丈夫ですよ、長尾警部」

「えっ？」

当時、日本語を理解する欧米人は希有であった。意外そうな顔をしている中年の刑事を前にして、深縁の帽子を被った若い貴婦人は、スカートの裾を軽くつまんで一礼した。

「ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・



リザード……シナモンとお呼びになられて、さしつかえありません」

……なんて優雅な身のこなしなんだ！

長尾警部以下、群馬県警の一団はしばし呆然となった。

## 後記

突然、パソコンを打っていた私の後ろに人の気配を感じ振り向くと佐藤氏が立っていました。クレームか……。

「スイーツマン！」

「はいはい、本日のご用は？」

「猛烈、うれしーぞ！」

「？」

そつ、そんな、激しく握手しないでくれーつ。貴兄の握力は尋常じゃないんだよーつ。こら、中居、どさくさに紛れて後頭部にチョコップ食らわすな！二人ともキスはいらんからな。

前回までの粗筋。

1920年代の終わりごろ、聡明で優雅な考古学者レディー・シナモンは、ライフワークとなる研究目的から日本を訪れていた。そのシナモンの取材のため、東京から、雑誌『東京倶楽部』の佐藤記者と中居カメラマンのコンビが、高崎に派遣された。二人は、そこで詩人萩原朔太郎に出会ったのだった。

他方、高崎郊外にある大類村には、利根川の中州である 軍艦島 といふところがあった。そこを訪れた画家竹久夢二は、遠望する榛名山をスケッチをしているとき、偶然に、女性の遺体を発見してしまう。

翌日、研究のため偶然、 軍艦島 を訪れたレディー・シナモンの一行は、捜査のために訪れた群馬県警の長尾警部と、佐藤記者・中居カメラマン一行にであうのだった。

### 主要登場人物

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……京都大学在籍の米国人女性考古学者。短期契約でリザード伯爵セシル家執事となり、シナモンのガイドを勤めている。

スイーツマン・ウルフレザー……リザード伯爵セシル家の老家宰。

『伯爵令嬢シナモン』の著者。

佐藤と中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。社命によりシナモンを取材中。

萩原朔太郎……群馬県出身の詩人。  
萩原愛子……朔太郎の妹。  
竹久夢二……奔放な詩人にして画家。  
長尾警部……群馬県警所属。「軍艦島事件」の担当者。

シナモンの傍らにいつもいるドロシー博士は、栗色の髪を短く切り添えている。ドレス姿ではない。赤紫色をしたベレー帽を被り、シャツもズボンもカーキ色で、軍服に近い格好だ。博士はシナモンにささやいた。

「人をひきづつたような痕跡があります。あなたが気に留めているのはそのことですね」

シナモンはうなづいた。

「崖の降り口から、軍艦島 に向かっています」

「ほおっ」

二人のやりとりを訊いていた長尾警部が少し感心してから謝辞をいった。

「いずれにせよ、現場を荒らさないでくださり感謝しますよ」

長尾警部にいわせれば、

軍艦島 で若い女性の遺体が発見された。女性の名は、黒岩梅。直接の死因は絞殺。第一発見者は画家竹久夢二。しかしながらこの梅と夢二、少し前まで、雑誌で恋仲がやりだまにあげられていた。また夢二は、昔、元妻が浮気をしたと勘ぐって刺したところのある殺人未遂の前科者。……つまるところ夢二は重要参考人である。

というのだ。

シナモンは後事を警部たちに任せて川原から退去した。佐藤たちは、シナモンがその際、崖から剥きだしになっていた鋭利に割れた石の破片を一つ採集したのを目にした。

「先輩、姫様が拾った石はなんすか？」

「石器のようだな」

「石器？」

「原始時代の人間、つまり、俺たちのご先祖様が落としていった道具だ」

崖の上には、佐藤と中居が、高崎の洋食屋で名刺を渡した詩人萩原朔太郎と、妹の愛子が待っていた。

「佐藤さん、中居さん、その方が噂のレディー・シナモンかい？」

朔太郎はシナモンに挨拶すると、早速、本題に移った。

……昨日、夢二から、「はめられた！」という電話があったんだ。このままでは彼が犯人になる。捜査費用は全額、僕が立て替えることにする。協力してほしい。

## 後記

「スイーツマン、お局様が帰り際に差し入れしてくれたぞ」

「これはこれは佐藤さん、好物のモンブランとダーズリン・ティーではありませんか」

「いい仕事してますねえ」

「それほどでもないですよ、中居さん」

しかしこれは見せかけの平和にすぎなかった……。

## 第1章 「軍艦島」4

### 前回までの粗筋

1920年代の終わりごろ、群馬県高崎郊外にある利根川の中州「軍艦島」で若い女性の遺体が発見された。容疑者は画家竹久夢二。夢二の知人萩原朔太郎は、雑誌『東京倶楽部』の佐藤記者を介して、群馬を訪れていた、レディー・シナモンに捜査を依頼する。

### 主要登場人物

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……京都大学在籍の米国人女性考古学者。短期契約でリザード伯爵セル家執事となり、シナモンのガイドを勤めている。

佐藤と中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。社命によりシナモンを取材中。

萩原朔太郎……群馬県出身の詩人。

竹久夢二……奔放な詩人にして画家。

黒岩梅……軍艦島で変死体として発見された女性。夢二の元交際相手。

朔太郎はシナモンに英語で、

「僕は推理もののファンでね、友人の江戸川乱歩が、英国の雑誌を読んでいる、あなたのことを何度も話していた。まさか、このような事件が起きて、実際にお会いできるとは思ってもいませんでした

よ

と話を続けた。

翌日……

軍艦島のある大類村の警察所轄は高崎警察署にある。高崎警察署は、国鉄高崎駅西口から、市電に乗って、陸軍連隊駐屯地のある城址の外縁に沿って北西にいったところにある。その拘置所に竹久夢二は収監されていた。

シナモンと夢二との面会は、佐藤や中居、それに萩原朔太郎兄妹が出向いて手続きした。

シナモンはドロシーと一緒に、面会室ではなく、特別な許可をとって、独房にいらしてもらった。畳四畳半の部屋、手洗い、高い天井、天井近くにある格子がついた明かり取りの小窓……。そこに画家はいた。夢二はやはり画家だった。拘置所内部をB5ノートサイズのスケッチブックに描きとっていた。

二人が独房に入ると、厳しい表情で絵を描いていた夢二の表情が急に和んで、いつもの夢見るような瞳になった。

……なんて美しいんだ。僕がいままで出会った女性たちとはまったく違うタイプだ。八頭身のプロポーションはミロのヴィーナよりも細くしなやかで、小顔に収まった知性を感じさせる瞳はサファイアのように。手入れの行き届いた髪は黄金をなしている。あらゆるものが完璧だ。女神とか天使というものが実在するならば、きっと、こんなふうになるに違いない。

「取り調べの警官が、……イギリスからきた女性が面会にきた。とびっきりの美人だった……と話していたよ。で？ 何から話せばいいの？」

「殺された黒沢梅さんとは、交際なされていたそうですが、別れた理由は？ 最後にお会いした場所と日付を教えてくださいませんか？」

「そのまえに、一枚かかせてくれない？ ヌードとまでは要求しないけどね」

シナモンは目を大きくした。

すると、傍らに控えていたベレー帽のドロシー博士が、思い切り、夢二に平手をくらわせた。スケッチブックが拍子で宙を舞う。

「立場をわきまえなさい、夢二さん」

ドロシーの平手で目が覚めたのか、夢二は一度二人をみると、スケッチブックを拾い、あとは下ばかりむいて供述をはじめたのだ。つた。

## 後記

「先輩、今日もスイーツマンはまじめに『伯爵令嬢シナモン』を執筆してましたよ」

「まあ、あきらめたんだろ？ なにせここは、怠け者の自作作家を収監する、株式会社雑誌『東京倶楽部』社員保養所 イゼルローン山荘 だからな。ここに収監された自作作家どもは、たとえ書きたくなくても、勝手に筆が進んでしまう場所だ」

佐藤と中居は、はにかんだ笑みをこぼして、スイーツマンを監禁している部屋をのぞきにいききました。

「中居、逃げられたぞ！」

「せつ、先輩、スイーツマンが、あんなところに……」

「あ、あの鳥は伝説の……」

蒼天の中空を巨大な白い鳥がスイーツマンの胴体をつかんで飛ん

でいくのです。スイーツマンを運ぶ伝説の白い鳥、その鳥とは  
..... (つづく)

.....というわけで次回は、イベントテーマ、「ペット」の記  
事となります。それでは、みなさん、素敵な週末を.....。こっ、こ  
ら、離すな！

つわああああ.....。ぎゃっ。



## 第1章 「軍艦島」5

### 【前回までの粗筋】

1920年代の終わりごろ、群馬県高崎郊外にある利根川の中州「軍艦島」で若い女性の遺体が発見された。容疑者は画家竹久夢二。夢二の知人萩原朔太郎は、雑誌『東京倶楽部』の佐藤記者を介して、群馬を訪れていた、レディー・シナモンに捜査を依頼する。レディー・シナモンは執事のドロシーを伴って、夢二の収監されている高崎警察署に赴き事情聴取を始めた。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォール  
の才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……京都大学在籍の米国人女性考古学者。短期契約でリザード伯爵セシル家執事となり、シナモンのガイドを勤めている。

スイーツマン・ウルフレザー……リザード伯爵セシル家家宰

佐藤と中居雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。社命によりシナモンを取材中。

萩原朔太郎……群馬県出身の詩人。

竹久夢二……奔放な詩人にして画家。

長尾警部……群馬県警の事件担当者。

黒岩梅……軍艦島で変死体として発見された女性。夢二の元交際相手。

### 【本編】

縁の広い帽子を被った若い貴婦人は詩人に訊いた。

「あなたは事件直後、電話で朔太郎さんに……はめられた……とおっしゃいましたね？ 心当たりがあるのですか？」

「実は、私が群馬にくる予定を組み、旅館の予約をとった週間前に、殺された黒岩梅から電話があつたのです」

そこでベレー帽を被ったアメリカ女性が冷めた口調で詩人にこづいた。

「おおかた元恋人の梅さんが、……夢二さんが会いに来ないと自殺するわ……といつてきたのでしょうか？ あなたは梅さんの言葉を無視した。そして人力車の車夫があなたを連れてきたのは『軍艦島』。そこで梅さんの変わり果てた姿をみつけた。あなたは……梅さんがあなたにいやがらせして自殺した。車夫と梅さんはグルだ……といいたいのですね？」

「どつ、どつしてそれを……」  
「一般的な見解ですよ」

ドロシーは細面である。背丈はシナモンよりも頭一つ高く、長身の佐藤と同じくらいある。花をいくつかしむようなシナモンとは対照的に、

眼差しは冬の三日月のようで鋭利だった。

その鋭利な眼差しに耐えきれなくなった夢二の視線は、救いをもとめるようにシナモンへと映った。現実逃避のスケッチが中断されたことによりハイテンションが終わり、急に、現実で自分が置かれている立場を思い出したのだろう。

シナモンは少し笑みを浮かべた。

「まずは黒岩梅様の遺体を観る必用があります。つぎに車夫の方にお会いしなくてはなりませんね」

と、さらにいくつかの要点を夢二から訊きだしてメモをと

り、  
収監室の外にでた。

シナモンとドロシーが出てくると係員が収監室に鍵をかけた。収監室の前には長尾警部が立っており、その人が先導して、しばらく廊下を歩いたところにある控え室にむかった。控え室には関係者が詰め、シナモンたちを待っていた。萩原朔太郎と愛子の兄妹、ウルフレザー家宰、そして佐藤・中居のコンビである。

控え室は煙草の煙で充満していた。煙草を吸わない愛子は通路の外側に立っていた。シナモンが戻って来るなり、佐藤は顔を真っ赤にして、

「ひっ、姫様、収監室から物音がしましたけれど、夢二の野郎、変なことをしませんでしたか？」

と訊いてきた。シナモンはドロシーをみやって、くすり、と短く笑った。ドロシーは少しばつが悪そうな顔をした。

シナモンが長尾警部に、

「黒岩梅様の死体を検分させていただけますか？」

と申し出ると、警部は、

「夢二は元夫人を刺した殺人未遂の前科があり、第一発見者ですからね。ほぼ犯人という線で捜査は終わりかかっていますよ」

というふうにいって。それでも、しびしび、遺体安置室に一行を案内したのだった。

## 【後記】

ここは、怠け者の自作作家を収監する、株式会社雑誌『東京倶楽

部』社員保養所 イゼルローン山荘 . . . 。収監された自作作家はどんなに遅筆であろうとも猛スピードで作品ができていくという噂がある。

分厚い防弾ガラスできた壁窓ごしに、中居と佐藤がモンブランとダーズリン・ティーで午後の紅茶を楽しんでいたのであった。

「どうだ、スイーツマン。スイーツがほしいだろう？ でもあげない」

. . . き、きつ、禁断症状が……。

忍耐のスイーツマンであった。そんな彼の身体とは裏腹に筆足だけは異様に速かった。

(《どこまでも》つづく……)

## 第1章 「軍艦島」6

### 【前回までの粗筋】

1920年代の終わりごろ、群馬県の利根川中州 軍艦島 で若い女性黒岩梅の遺体が発見された。容疑者は画家竹久夢二。夢二の知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。そして高崎警察署遺体安置室へ。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……京都大学在籍の米国人女性考古学者。短期契約でリザード伯爵セシル家執事となり、シナモンのガイドを勤めている。

スウィーツマン・ウルフレザー……リザード伯爵セシル家家宰

佐藤と中居雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。社命によりシナモンを取材中。

萩原朔太郎……群馬県出身の詩人。

竹久夢二……奔放な詩人にして画家。

長尾警部……群馬県警の事件担当者。

黒岩梅……軍艦島 で変死体として発見された女性。夢二の元交際相手。

### 【本編】

遺体安置室は地下にあるためすこしひんやりしている。線香、防腐剤、カビ、それに遺体そのもから漂う臭いが混ざって重たくよどんだ空気となる。裸電球のスイッチを入れると室内が照らされた。

長尾警部のあとについて、入室を許可されたのは、シナモンとドロシー博士だけである。もっとも許可されたとしても、シナモンの熱烈ファンである佐藤以外誰も入りたいとは思わないだろうけれど。

シナモンとドロシー博士は祈りを捧げてから、安置室に入った。

電球のせいでオレンジ色になつてはいるが、実物は白いはずの、壁、祭壇、布を被せた寝台。遺体は寝台に仰向けにされていた。色白細面で、髪の毛長い……いかにも夢二の絵にでてるタイプの……女性だった。外傷は、みみず腫れになつた首をしめたあとがある。

……首をくくつたのなら、前しか縄のあととはつかない。遺体は首の後ろにも縄のあとがある。警察のいうように他殺のよう。夢二さんのいうように、自殺ではない。

シナモンが十五分ほど、死斑の状態、足の裏の状態を観察してから、1階にあがった。ドロシーはそこで大きく深呼吸した。そして遺留品が置いてある部屋にも通してもらった。中庭に臨んだ明るい部屋だ。

黒岩梅の履いていたのは革の靴である。もちろん洋装だ。和服を想像していたのに少し裏切られた感がある。靴のつま先のほうにはやはり引きずられたような痕跡がある。ドロシー博士がシナモンにささやいた。

「姫様、あなたが川原で、異常な痕跡をみつけて、私と家宰を現場から遠ざけたのは、そういうことですね？」

「はいそうです。引きずったあとがどこからきたのか、どういうふうに 軍艦島 に引き上げたかというのが問題ですね。鳶をつかってようやく登るような絶壁の 軍艦島 に引き上げるには、よほどの力がいります」

クールな瞳をした背丈のあるベレー帽の女性が質問した。

「で？ 犯人は川原に複数の足跡を残しましたか？ 一人でしたか？」

「一人です。川原には舟をつけたあとがありました。犯人は舟を使っています。このあたりは急流ですからね。手漕ぎのボートではなく、エンジンのついた舟でしょう」

深縁の帽子を被った若い責婦人が微笑んだ。その言葉で、ドロシ博士は、おぼろげながら犯人像が浮かんできたようだ。

……筋肉質の男。エンジンのついた舟を操れる。

シナモンは靴についた微細な砂礫を採取した。犯人が黒岩梅を殺したときに遺体を引きずったつま先部分に刺さった砂礫、それから黒岩梅自身が生きているときに本人があるいてついたかかとの砂礫……これをピンセットで採取して小さなガラスケース シャーレに収めた。

家宰に、佐藤・中居、それに萩原兄妹は、玄関先の待合室に移動して、煙草をふかしたり雑談していたりした。シナモンがくるなり、佐藤に、

「このあたりの地質学、とくに岩石に詳しい専門家はいらっしやいませんか？」

と訊ねた。佐藤は電話を借りてすかさず本社スタッフに問い合わせをすると、喜々としてメモをシナモンに渡したのだった。シナモンは礼をいって、メモを家宰に渡した。

「家宰、地質学に詳しい教授のところに行つて欲しいのです。佐藤様、中居様、家宰は日本語が達者ではありません。申し訳ないのですが通訳をお願いできないでしょうか？」

「はい、喜んで！」

中居は佐藤の顔をみた。声の元気良さとは裏腹に、落胆の様子が瞳ににじんでいる。

## 【後記】

ここは、怠け者の自作作家を収監する、株式会社雑誌『東京倶楽部』社員保養所 イゼルローン山荘 である。収監された自作作家はどんなに遅筆であろうとも猛スピードで作品ができていくという噂があるところである。

とつぜん、分厚い防弾ガラスできた壁窓を叩く音がした。

「じんじん。」

佐藤・中居が立っている。

「あつ、スイーツマンが、こっちをみましたよ、先輩……」

（わしゃ、動物園の珍獣か！）

（《どこまでも》つづく……）



## 第1章 「軍艦島」7（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com  
/

## 第1章 「軍艦島」7

### 【前回までの粗筋】

1920年代の終わりごろ、群馬県の利根川中州 軍艦島 で若い女性黒岩梅の遺体が発見された。容疑者は画家竹久夢二。夢二の知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。高崎警察署でいくつかの手がかりを得たシナモン。遺留品である岩石の微細片を専門家に鑑定してもらうため家宰・佐藤・中居を送りだし、自らは朔太郎兄妹、ドロシー博士といっしょに、事件当日、夢二を載せた車夫のところへむかうのだった。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォール  
の才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……京都大学在籍の米国人女性考古学者。短期契約でリザード伯爵セシル家執事となり、シナモンのガイドを勤めている。

萩原朔太郎……群馬県出身の詩人。

萩原愛子……朔太郎の妹。

竹久夢二……奔放な画家。

黒岩梅……軍艦島 で変死体として発見された女性。夢二の元交

際相手。

豆吉……事件当日、夢二を乗せた人力車の車夫。

### 【本編】

朔太郎に案内されて市電を降りるとすぐに、街の雑踏ざつとつがきこえてきた。自転車、行き交う人の声、砂利道を行き交うまだ少ない自動車の排気音、それに遠くの工場からは、鈍かったり鋭いかったりする金属音が鳴り響く。タールやらペンキやらを塗ったくつた木造瓦葺きの商店街からは、豆腐とうふや蕎麦そばといった匂いが土埃ちいに混じって漂っていた。

人力車の店舗があるのは高崎駅前だ。木造平屋で、軒先には人力車が連なっている。客待ちの車夫は五人ほどおり、昼近くであるため、土間で弁当をかきこんでいた。

朔太郎が車夫に訊いた。

「豆吉さんはいるかね？」

車夫の一人が吐き捨てるように答えた。

「また刑事さんかい？ 豆吉ならいねえよ。 あいつは、明け方、女郎と駆け落ちしてどつかへいつちまったみていだ……可愛そうに、おかみさんが泣いてたぜ。女房・子供には書き置きだけしか残してやらなかったんだとよ……そんな具合だから俺たちにも何の断りもねえ。まったく、あんな薄情な野郎だとは思わなかったわい」

深緑の帽子を被った若い貴婦人と、クールな瞳をした背丈のあるベレー帽の女性が顔を見合わせた。朔太郎と妹の愛子も途方に暮れている。

やがて、気を取り直したシナモンが、駆け落ちした車夫について、仲間の車夫にいろいろ訊き始めた。事件当時、夢二が店先を訪れたときの様子、豆吉との会話、服装や所持品、天気や出発時の方向……。そして、駆け落ち相手の女郎宿の場所、豆吉の居所などを訊き

でした。

四人は、手分けをして調べることにした。朔太郎とドロシー博士が女郎宿へ、シナモンと愛子は豆吉の家にむかったのである。

## 【後記】

ここは、怠け者の自作作家を収監する、株式会社雑誌『東京倶楽部』社員保養所 イゼルローン山荘 である。収監された自作作家はどんなに遅筆であろうとも猛スピードで作品ができていくという噂があるところである。

私は執筆の途中、怪しげな視線に気がついて、防弾ガラスをはめ込んだ後ろの壁を振り返った。

なっ、なんだ〜！

むこうの部屋の佐藤と中居がガラス壁にヤモリのように、べたり、と顔を貼り付けているではないか……。ずっとそうしていたのだらうか？ だとすれば、ヒマだ。ヒマすぎる……。。

（《どこまでも》つづく……）

## 第1章 「軍艦島」8（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com  
/

## 第1章 「軍艦島」 8

### 【前回までの粗筋】

1920年代の終わりごろ、群馬県の利根川中州 軍艦島 で若い女性黒岩梅の遺体が発見された。容疑者は画家竹久夢二。夢二の知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンは、朔太郎兄妹と、事件当日夢二を乗せた車夫豆吉のところへむかたのだったが、女郎と駆け落ちしたあとだった。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。

「コンウォールの才媛」の異名がある。

萩原愛子<sup>はぎわら あいこ</sup>……萩原朔太郎の妹。

竹久夢二<sup>たけひさ ゆめじ</sup>……奔放な画家。

黒岩梅<sup>くろいわい ume</sup>……軍艦島 で変死体で発見された女性。

夢二の元交際相手。

豆吉<sup>まめきち</sup>……事件当日、夢二を乗せた人力車の車夫。

### 【本編】

くすんだ板壁の長屋が連なる狭い路地を進んでいくと、手動ポンプ式の井戸のある小さな広場があり、広場から北口に入った平屋の部屋が豆吉の家であった。シナモンと、愛子が、玄関をくぐるうとしたとき、幼子が激しく泣いているのがきこえてきた。勝手に調理場を兼ねた小さな土間、奥にある六畳一間の部屋に豆吉の子供三人がいた。

子供三人のなかで最年長の娘が、赤ん坊を背負ってあやしていたが、泣いているのは赤ん坊だけではなく下の弟だ。長女はそれこそ泣きつ面で、弟までは手が回らない。愛子が駆け寄って男の子をあやそうとしたのだがいつこうに泣きやむ気配がない。

「みて……」

深縁の帽子をかぶった若い貴婦人が右手を幼子のほうにむけた。少女もみた。

……あつ！

……カーネーション、ゆり、ゆり、ばら。

戸口にいた白いドレスのシナモンが、差し込む光のために、シルエットになっている。手からは、次から次へと、紅、白、赤紫といった花が、宝石のように輝いて、ほろほろ、とこぼれ落ちていくではないか。花々は、回転しながら、ゆっくり、床に舞い降りていく。

……手品……いいえ、魔法だわ、この人は白い花の妖精なんだ！

愛子は一瞬、時間がとまったように感じた。幼子は、みとれて、泣くのをやめた。

いつの間に戻ってきたのか、土間に立ったシナモンの後ろに、豆吉の妻が立っていた。いまにでも食ってかかりそうな、険しい顔をしていたのが、すっかり、毒気を抜かれたようになっていた。振り返ったシナモンが、

「豆吉さんの奥様でいらっしやいますね？」  
と訊くと、豆吉の妻が素直にうなづいた

## 【後記】

ここは、怠け者の自作作家を収監する、株式会社雑誌『東京倶楽部』社員保養所 イゼルローン山荘 である。収監された自作作家はどんなに遅筆であろうとも猛スピードで作品ができていくという噂があるところである。

寝ていた中居が起きて、隣の佐藤を起こした。

「せ、先輩、スイーツマンがいません！」

ガラスをはめ込んだ壁のむこうで、もくもくと、パソコンを打ち込んでいたはずの自作作家の姿がないではないか。

調べてみると、ベッドの横の床の煉瓦が外され、穴が掘られている。掘った土は備え付けの水洗トイレに流していたようだ。数ヶ月かかる作業だ。とても監禁されてから一週間でできることではない。著者の特権を悪用したご都合主義である。

……スイーツマンめ！



( ..... ) 《 》

## 第1章 「軍艦島」9（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com  
/

## 第1章 「軍艦島」9

### 【前回までの粗筋】

1920年代の終わりごろ、群馬県の利根川中州 軍艦島 で若い女性黒岩梅の遺体が発見された。容疑者は画家竹久夢二。夢二の知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンは、朔太郎兄妹と、事件当日夢二を乗せた車夫豆吉のところへむかたのだったが、女郎と駆け落ちしたあとだった。豆吉の残された家族は……。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

萩原愛子<sup>はぎわら あいこ</sup>……萩原朔太郎の妹。

竹久夢二<sup>たけひさ ゆめじ</sup>……奔放な画家。

黒岩梅<sup>くろいわい ume</sup>……軍艦島 で変死体で発見された女性。夢二の元交際相手。

豆吉<sup>まめきち</sup>……事件当日、夢二を乗せた人力車の車夫。本名は吉之助。

### 【本編】

シナモンと愛子は座敷の縁に座らせた豆吉の妻が、「茶がないので」といって白湯をだした。

「今でこそ落ちぶれてはいますが、あれでも、あの人、士族なので

すよ。上総国 1 請西藩こいざいはんというところの奉行けいぎょうの孫にあたるそつ  
です。豆吉まめきちというのは通り名で、ほんとうは吉之助きちのすけというんですよ

「士族？」

シナモンが訊きかえすと、愛子が、代わって答えた。

「サムライですよ。いまでは刀こそ差しませんけれどね」

豆吉の妻は、生活に追われてやつれている。けれども市井のおか  
みというには応対が粗野ではなかった。

豆吉の妻は、

豆吉は愛妻家で子供たちを愛していた。食うのがやっとうという生  
活であった。上州じょうしゅう 2 は、賭博とくぱくが盛んなところであるが、他の  
車夫たちに混じって遊ぶことはなかった。酒や煙草もやらない。家  
はみでの通りの長屋暮らしであり、そんな余裕がないのも確かだが、  
浮いた日銭はすべて家族のために渡していた。そんな豆吉が、妻子  
を裏切つて、女郎と駆け落ちするというのは、不自然で、信じられ  
ない。

と話した。

シナモンと、愛子もうなづいた。それにしても、

……請西藩。

シナモンは、その名が気になった。

他方、色街の女郎宿にむかったドロシー博士・朔太郎組は……。

1 千葉県の古名

2 群馬県の古名

【後記】

「追いつめたぞ、スイーツマン！」

「ほれほれ、『シナモン』第1話9のメモリー・スティック」

「よこせ！」

「やるよ」

ぼい。

……なんてことを。

ダダダダ……。

「先輩、俺たち犬みたいっすね」

「中居、おまえは追えよ」

「あつ、いけね。逃げられちゃいましたね」

（《どこまでも》つづく……）

## 第1章 「軍艦島」10（前書き）

前書き

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

http://r24eaonh.blog35.fc2.com  
/

## 第1章 「軍艦島」 10

### 【前回までの粗筋】

1920年代の終わりごろ、群馬県の利根川中州 軍艦島 で若い女性黒岩梅の遺体が発見された。容疑者は画家竹久夢二。夢二の知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンは、愛子と、事件当日夢二を乗せた車夫豆吉のところへむかった。豆吉は女郎と駆け落ちしたあと。しかし妻の証言からはそのような素振りはないという。他方、女郎宿にむかったドロシー博士と朔太郎組は……。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……アメリカ人考古学者。日本の古建築・ガラスを研究している。短期契約で伯爵家執事になっている。

竹久夢二……奔放な画家。

萩原朔太郎……群馬県の詩人。

黒岩梅……軍艦島 で変死体で発見された女性。夢二の元交際相手。

豆吉……事件当日、夢二を乗せた人力車の車夫。本名は吉之助。

### 【本編】

中院なかにわに面した茶室だ。中院は、水槽すいそうと灯籠とうろうを一つずつ配し、それ

を中心に頭大の川原石を敷きつめている。苔むしたそれらとは対照的に、背後には竹を束ねた垣根は（かきね）真新しい。垣根は外部から茶室を完全に遮断しゃだんしていた。

茶室に通されたドロシー博士と朔太郎は、女郎宿の店主と対面していた。禿げあがった頭部、丸いサングラス、腹までのびた白い髭、立ち上がれば百八センチをこえる体躯……。会話の途中で、ときどき微笑む老人だ。よくみると、顔や腕に刀傷がいくつもあった。

そのことが渡された茶碗をもつ朔太郎の手を小刻みに震えさせていた。どうにか、口にして、懐紙かいしで縁をふきとってドロシーに茶碗を渡した。

ドロシーは朔太郎から器を受け取り、作法にしたがって飲み干してから、

岸駒がんこ 2。渋みがあり、常滑 3の壺にさした紫陽花を引き立たせています。

と言葉した。白髭の老人は、サングラスを外してドロシーをみやった。片方は刀傷で潰れ、残る眼は鷹のように鋭い。サングラスをしているのは、伊達ではなく、威圧感を消す配慮だ。

「ほお、儂わしをみて震えぬばかりか、茶の作法をも心得、茶器ちきや南画なんが 4にも造詣ぞうけいがある。いや、感服した」

急に、老人が片手をあげた。すると、壁の裏側で物音がした。六七人はいるであろう。

天上近くには襖ふすまになっている。老人の号令一下、一斉にそれが開いて、人数分の槍が飛びだし、ぐさっ、と刺してきたに違いない。

朔太郎は、泣きつ面つらで冷や汗をぬぐった。



……こつ、これが女郎宿かよ。ふつう、武者隠し なんか  
おくか。もしかしたら俺たち、槍で一突きにされるところだったか  
もしれなかつたんだ！

花街の顔役でもある女郎宿の店主は、隼人はやとという名で、その筋で  
は、「高崎の老人」と呼ばれている。「高崎の老人」は、からから  
と笑った。

1・3 焼き物の産地。 2 江戸時代の画家の名。 4 近代以前の  
手法をとった伝統的な日本画。

## 【後記】

森の中を進む二人の影があつた。

……地蔵を彫つた大木から、西へ七歩進み、そこからさらに  
北へ二歩むかつたところを掘るべし。

がさがさ。

「宝石箱だ。あけてみましょう、先輩……あつ、メモリーステ  
イック、ありましたね！」

「メッセージがそえられているぞ」

「ここ掘れ、わんわん！」

スイーツマンめ……ば、馬鹿にしおつて……。

(トーンが低くなってきた。まっ、まじぎれっすか、先輩?)

( ..... ) 《 》

.

## 第1章 「軍艦島」11（前書き）

前書き

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

http://r24eaonh.blog35.fc2.com  
/

## 第1章 「軍艦島」 11

### 【粗筋】

1920年代末が舞台。群馬県で殺人事件が起きた。容疑者は竹久夢二。夢二の知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は手分けして捜査を開始。シナモンの助手役となったドロシー博士と朔太郎組はききこみに女郎宿に行き、「高崎の老人」と呼ばれる人物と対面していた。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……アメリカ人考古学者。日本の古建築・ガラスを研究している。短期契約で伯爵家執事になっている。

竹久夢二たけひさ ゆめじ……奔放な画家。

萩原朔太郎はぎわら さくたろう……群馬県の詩人。

高崎の老人……豆吉と行方をくらました遊女がいた女郎宿の店主。本名は、隼人はやとという。

豆吉まめきち……事件当日、夢二を乗せた人力車の車夫。士族で本名は吉之助という。事件直後、高崎の遊女と失踪。

### 【本編】

「逃げた女郎……菊か……人をやって捜している最中だ。ただし、相手は豆吉という車夫だそうだな」

白髭の老人はそれ以上は語らなかつた。ただドロシー博士をいた

く気に入った様子で、

「アメリカの女侍」

と呼んで、自らがしていたサングラスを渡し、

「似合うぞ」

といってまた笑った。朔太郎は、ベレー帽を被ったドロシーは学者というよりは軍人のように感じていた。さつそく、高崎の老人から贈られたサングラスをかけたドロシー博士はあたかも高級将校のようにみえたのだった。

二人は女郎宿をでて花街を歩いた。

木造二階の宿屋が並び、格子ごしに、不自然な白粉おしろいを塗ったくつたやたらに赤のめだつ和服の女たちが目立つ。通行人にからむ女郎たちや客引きの男たちも、アメリカの女侍には道を譲った。

疲れきった顔の朔太郎が、

「収穫ゼロでしたね、ドロシーさん」

といった。

けれどもドロシーは微笑んだ。

「無関係なら、何も知らないとはいわない。高崎の老人、事件に深く関わっている。履歴書をつくってみましょう。市役所で戸籍を調べてみます。いろいろと出てくるはずですよ」

ブランドものらしく、サングラスがいたく気に入っているようだ。

いっぽう、東京へむかった家宰と佐藤・中居たちは……。

## 【後記】

森の中に、樹木のない広場のような場所があり木漏れ日がさしていた。白い丸テーブルと椅子が置かれてある。テーブルの上にはケーキケース、ティーポット、三人分のティーカップが並べてあった。まるでこれからティーパーティーが始まるかのよう。

「やあ、佐藤さんに中居さん。紅茶でもいかがが……」

「な、な、なにが紅茶だ。スイーツマンめ！」

「せ、先輩、い、いくらなんでも、こ、殺さないでくださいよ」

だだだだだ……。どすん。

わーい、落とし穴だーっ！

「第1章11のメモリー・ステイック、ここに置いておきますよ。では、ごゆっくり」

ふおーっ、ふおーっ、ふおーっ。

（《どこまでも》つづく……）

第1章 「軍艦島」 12 (前書き)

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com  
/

## 第1章 「軍艦島」 12

### 【前回までの粗筋】

1920年代末が舞台。群馬県で殺人事件が起きた。容疑者は竹久夢二。夢二の知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は手分けして捜査を開始。シナモンの指示で東京にむかった家宰一行は……。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

スイーツマン・ウルフレザー……伯爵家の老家宰。『伯爵令嬢シナモン』の著者。

竹久夢二たけひさゆめじ……奔放な画家。

萩原朔太郎はぎわら さくたろう……群馬県の詩人。

佐藤と中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。

### 【本編】

……片岩ですね。利根川流域では、群馬県の前橋・高崎あたりには存在しません。下流に行った埼玉県本庄付近からあります。本庄にある神川（かなな川）という支流がありましてね、上流が秩父山地になるのですが、そこら一帯の基盤層になってますよ。

東京帝国大学で地質学を研究している教授からコメントをもらっ



て、シナモンの待つ高崎への帰途のことである。ウルフレザー家宰、佐藤記者、中居カメラマンの三人組が、東京駅のホームから高崎行きの汽車に乗り込もうとしていた。佐藤は何げなく売店で新聞を買った。

「先輩、何か面白い記事はありましたか？」

「中居、大和屋やまのや太ふとしって知っているか？」

「ああ、阿片密売組織の元締めでしたね。上海の閻組織ちんぱん青幣せいへいと関わっていた奴でしょ」

「刺されたようだ」

「えっ？」

家宰は、二人が早口で日本語をまくしたてていたので、説明を求めていたところで、汽笛が鳴った。

「家宰、早く、列車に乗り込まないと……」

一行は汽車に乗り込んだ。

## 【後記】

「私こそ、レディー・シナモンのモデルよ。おほほほ……」  
井戸の縁に立っていたのは……。

「……ああっ、雪男のメス、お局様だあ！」

「な、中居、業界のタブーを……」

「加速装置」

かちっ。

だだだだだ……。

「どさくさに紛れて、逃げるな、スイーツマンめ！ こっちはワーブだ！」

「おお、先輩、捕獲しましたね」

「だーれ？ 私を雪男のメスだなんて言ったのは！ 私は雪女、レディー・シナモンのモデルよ。お仕置き呪文……」

ぶり、ぶり、ズーど。

ひゅるるるる……。

……先輩、俺、駄目すつ。（遭難）

……スイーツマンの肩にかけた俺の手から毛が、げっ、猫の腕になっていく……。

かくして佐藤は猫となって、スイーツマンの部屋に居候することとなった。

「佐藤さん、『シナモン3』1章12ができたよ」「  
にゃん

）《どこまでも》つづく（

第1章 「軍艦島」13（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

http://r24eaonh.blog35.fc2.com  
/

## 第1章 「軍艦島」 13

### 【前回までの粗筋】

1920年代末が舞台。群馬県で殺人事件が起きた。容疑者は竹久夢二。夢二の知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は手分けして捜査を開始。シナモンの指示で東京大学で岩石鑑定をもらった家宰一行は高崎に帰る汽車に乗った。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。

スイーツマン・ウルフレザー……伯爵家の老家宰。『伯爵令嬢シナモン』の著者。

佐藤と中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。

竹久夢二……奔放な画家。

萩原朔太郎……群馬県の詩人。

大和屋太……上海の闇組織青幣とも関わる阿片商人。何者かに暗殺される。

### 【本編】

上海共同租界の一隅に大和屋商会というのがある。大和屋商会は第一次世界大戦の少し前に設立された。表向きは穀物取引をしているが裏では、上海の青幣を仲介させて、日本軍勢力圏・親日軍閥に

阿片を流している阿片商人だ。

佐藤から新聞の内容を訊かされた家宰は、脳髄に電撃が走る思いがした。もちろん、家宰もシナモンも、関わりをもとうはずがないのに、漠然とした不安があった。

「顔色が悪いですね。どうしたんです、家宰？」

佐藤が訊いた。家宰は、そのことには直接触れずに話題を変えた。夏とはいえ梅雨にはいったばかりの季節だ。宵は涼しく、あふれ出る汗の量は尋常なものではない。

「私には不安がある。嘗々と築き上げてきた文明というものの自体が、がらがらと、音をたてて崩れるような夢をみるのです」

「？」

さらに家宰は話題を変えた。

「姫様はお強い方だとお思いか？」

中居が答えた。

「半端な強さじゃないですよ。並の人間にはない強さがある」

「いや、たしかにお強い。しかしすこぶるお強いというわけではない。――人々は姫様の優しさにすがろうとする。姫様もつい手をさしのべてしまう。だが、姫様とて生身。あまりにも多くの人間がすがりつけば姫様自体が押し潰されてしまう」

「なるほど、それで、ドロシー・ブレイヤー博士のような人を姫様の盾に置くのですね」

佐藤がそういうと、家宰は苦い笑いをした。

車掌が切符を切りにきたので話がそこで止まった。

【後記】

姫様の称号は、「ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・リザード」だ。「ザ・ライト・オノラブル」は貴族であることを示している。貴族の娘で、「レディー」を称することができるのは伯爵令嬢以上でなければ許されない。「セシル」は姓、「リザード」は領地としている地名をさしている。

スイーツマンの家で、猫としての居候生活にも慣れてきた。どういっわけだか、称号というものがついた。

……お座りレベル3、「前向きでこなれたお座りする佐藤」

なんだろう、この感覚は。姫様に少し近づいた気がして嬉しい。我が輩は佐藤である。名前はまだない。

）《どこまでも》つづく（

第1章 「軍艦島」14 (前書き)

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

http://r24eaonh.blog35.fc2.com  
/

## 第1章 「軍艦島」 14

### 【前回までの粗筋】

1920年代末。群馬県で殺人事件の容疑者は竹久夢二。知人の萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は手分けして捜査を開始。そして……。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォール才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……米国考古学者。日本古代建築・古代ガラス工芸研究者。短期雇用契約で伯爵家執事に収まった。

佐藤と中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。

伯爵家の老家宰スイーツマン・ウルフレザー。奔放な画家で容疑者の竹久夢二。群馬の詩人萩原朔太郎。朔太郎の妹萩原愛子。群馬県警長尾警部。女郎宿の店主「高崎の老人」（隼人）。車夫豆吉（土族、吉之助）。女郎の菊、殺人事件被害者の黒岩梅。暗殺された阿片商人大和屋太。請西藩元藩主林忠崇

### 【本編】

榛名山山頂には、カルデラ湖の榛名湖がある。白樺で囲まれ、砂浜となった湖畔に臨んで、いくつかの山荘が建ち並んでおり、その一つにシナモンたちは宿泊した。



ドロシー博士や家宰たちが集めた情報をシナモンはノートにまとめてみた。事件関係者はある人物に共通して関連してくることが判った。

――請西藩元藩主林忠崇

林忠崇という人物は、上総国の小大名である。（いずれは幕閣に）と囑望されていた人物で、戊辰戦争では藩士の大半五十余名とともに脱藩した。旗本御家人からなる遊撃隊と合流し、新遊撃隊を結成。関東から奥州を転戦した。

戊辰戦争では、前線指揮官として兵卒とともに戦場を駆けめぐった唯一の大名戦士だ。一時期は賊軍あがりとして、明治政府から士族に降格薄遇された。現在は、名誉を回復し、無爵ながら華族に列せられている。八十歳の高齢ながら存命だ。

まず、失踪した車夫まめ吉こと吉之助は請西藩の奉行の孫だ。

高崎の老人　こと隼人は、前橋藩士であったが、戊辰戦争では、脱藩して新遊撃隊に合流している。

黒岩梅と女郎の菊は、遊撃隊に加わった武士の孫娘にあたる。

シナモンの一行が榛名湖を訪れたのには理由があった。問題の林忠崇が、毎年、今頃の季節になると榛名湖の山荘の一つを訪れているという話を聞いたからだ。忠崇の滞在している山荘は　高崎の老人　の所有となっている。

シナモンたちは、翌朝、忠崇が滞在している山荘に向かった。

## 【後記】

スイーツマンが甘党であるとか食通であるという噂がたっている。甘党というのは本当だ。食通というのはいかなものか？ きゃつは、先日、コンビニで山崎のパンを朝食に買って食べていた。

猫としてのお座りレベルが5になった。

我が輩は佐藤である。名前はまだない。

）《どこまでも》つづく（

第1章 「軍艦島」15（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

http://r24eaonh.blog35.fc2.com  
/

## 第1章 「軍艦島」 15

### 【前回までの粗筋】

1920年代末。群馬県で殺人事件の容疑者は竹久夢二。知人の萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は手分けして捜査を開始。そして……。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォール才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……米国考古学者。日本古代建築・古代ガラス工芸研究者。短期雇用契約で伯爵家執事に収まった。

佐藤と中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。

伯爵家の老家宰スイーツマン・ウルフレザー。奔放な画家で容疑者の竹久夢二。群馬の詩人萩原朔太郎。朔太郎の妹萩原愛子。群馬県警長尾警部。女郎宿の店主「高崎の老人」（隼人）。車夫豆吉（土族、吉之助）。女郎の菊、殺人事件被害者の黒岩梅。暗殺された阿片商人大和屋太。請西藩元藩主林忠崇

### 【本編】

榛名山山頂には、カルデラ湖の榛名湖がある。白樺で囲まれ、砂浜となった湖畔に臨んで、いくつかの山荘が建ち並んでおり、その一つにシナモンたちは宿泊した。

ドロシー博士や家宰たちが集めた情報をシナモンはノートにまとめてみた。事件関係者はある人物に共通して関連してくることが判った。

――請西藩元藩主林忠崇

林忠崇という人物は、上総国の小大名である。(いずれは幕閣に)と囑望されていた人物で、戊辰戦争では藩士の大半五十余名とともに脱藩した。旗本御家人からなる遊撃隊と合流し、新遊撃隊を結成。関東から奥州を転戦した。

戊辰戦争では、前線指揮官として兵卒とともに戦場を駆けめぐった唯一の大名戦士だ。一時期は賊軍あがりとして、明治政府から士族に降格薄遇された。現在は、名誉を回復し、無爵ながら華族に列せられている。八十歳の高齢ながら存命だ。

まず、失踪した車夫まめ吉こと吉之助は請西藩の奉行の孫だ。

高崎の老人　こと隼人は、前橋藩士であったが、戊辰戦争では、脱藩して新遊撃隊に合流している。

黒岩梅と女郎の菊は、遊撃隊に加わった武士の孫娘にあたる。

シナモンの一行が榛名湖を訪れたのには理由があった。問題の林忠崇が、毎年、今頃の季節になると榛名湖の山荘の一つを訪れているという話を聞いたからだ。忠崇の滞在している山荘は　高崎の老人　の所有となっている。

シナモンたちは、翌朝、忠崇が滞在している山荘に向かった。

【後記】

スイーツマンが甘党であるとか食通であるという噂がたっている。甘党というのは本当だ。食通というのはいかなものか？ きゃつは、先日、コンビニで山崎のパンを朝食に買って食べていた。

猫としてのお座りレベルが5になった。

我が輩は佐藤である。名前はまだない。

）《どこまでも》つづく（

第1章 「軍艦島」16（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

<http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com/>

挿絵つき

## 第1章 「軍艦島」 16

### 【前回までの粗筋】

1920年代末。群馬県での殺人事件容疑者となった竹久夢二。知人の萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は手分けして捜査を開始。事件関係者を結んでいくと捜査線上に戊辰戦争で活躍した林忠崇という元大名が浮かびあがってきた。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォール  
の才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……米国考古学者。日本古代建築・古代ガラス  
工芸研究者。短期雇用契約で伯爵家執事に収まった。

佐藤と中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。

伯爵家の老家宰スイーツマン・ウルフレザー。奔放な画家で容疑者  
の竹久夢二。群馬の詩人萩原朔太郎。朔太郎の妹萩原愛子。群馬県  
警長尾警部。女郎宿の店主「高崎の老人」（隼人）。車夫豆吉（土  
族、吉之助）。女郎の菊、殺人事件被害者の黒岩梅。暗殺された阿  
片商人<sup>まこや</sup>大和屋太。請西<sup>はやし</sup>藩元藩主<sup>ただたか</sup>林忠崇

### 【本編】

高崎の老人 隼人は、皆をヨットに乗せると、器用に操った。



ヨットは白波をたてて榛名湖の中ほどに走っていく。青い横線が入った高い三角帆、船体も白い。十人乗りの少し大きな船だ。

……エンジン付きではないけれど、この人は舟を操舵できる。

下流で殺害した黒岩梅の遺体を、エンジン付きの舟に乗せて、軍艦島に運び、川原から強靱な体力で上まで運びあげる。隼人の年齢だけきけば警察とて、考えの及ぶところではあるまい。

シナモンはそう思った。高崎の老人は、意にも介さぬ様子だ。

もう一人の老人林忠崇卿は遠い目をして、

「長崎丸を思い出すのお」とつぶやいた。

近くにいた佐藤は、ほお、とつぶやいた。

長崎丸は、旧幕府海軍に所属したスクーター型二本マストの鉄製蒸気船で、輸送船であった。

旧幕府の海将榎本武揚は、三隻からなる艦隊を派遣し、小田原で戦っていた林忠崇ら率いる遊撃隊士百名を三隻のうちの一隻である長崎丸に収容すると、奥州の小名浜に上陸させた。

長崎丸は、旧幕府海軍に所属したスクーター型二本マストの鉄製蒸気船で、輸送船であった。スクーターとは縦帆の船のことで、ヨットのようにも見えなくもない。

記者のはしくれである佐藤は、最後の大名である林忠崇卿の戊辰戦争武勇伝は承知しており、戊辰戦争の昔日に思いをはせたのだ。た。

湖というのは波がないようで、対流もあれば風も吹く。棧橋を離

れたヨットは、水面を斬って瞬く間に湖の中央に滑り出していく。

避暑地におけるクルージングの爽快さから、シナモンに随行した人々は緊張をゆるませていたなかにあつて、ドロシーだけは警戒を緩めなかった。サングラスで隠した双眼で、ヨットを操る 高崎の老人 と、忠崇卿の動きをずっと追いかけている。

ドロシーに守られたシナモンは、突然吹いた強風で帽子が飛びそうになるのをどうにか両手でおさえた。

## 【後記】

猫となつて考える。飼い慣らされた虎は虎といえるのだろうか。図体がでかいだけの猫でしかないのではないか？ そういう自分は猫そのものではないか？

憤然と、スイーツマンの部屋をでた。とくに何をするわけでもない。付近を散策すると、岩陰をくり抜いた祠があり、秘密めいた階段が地下へとつづいている。時折きこえるのは滴の音だけのはずなのに、何者かが奥で呼んでいるようにも感じた。

虎だ、おまえは虎になるのだ！

そ、そうか、ここが伝説の……。

思いもかけず「虎の穴」を発見した。嵐の予感。平穏な日々との決別。しかし「変化」することへの誘惑にはあがなえない。体を低くしながらも、そろそろと、闇の奥へとつづく階下へと脚が動いてしまつのはなぜだ。

我が輩は佐藤である。名前はまだない。

( ^ ^ ) 《 》

第1章 「軍艦島」17（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

<http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com/>

挿絵つき

## 第1章 「軍艦島」 17

### 【前回までの粗筋】

1920年代末。群馬県での殺人事件容疑者となった竹久夢二。知人の萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は手分けして捜査を開始。事件関係者を結んでいくと捜査線上に戊辰戦争で活躍した林忠崇という元大名が浮かびあがってきた。榛名湖のヨットで、シナモンたちは林忠崇のもてなしをうけた。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォール  
の才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……米国考古学者。日本古代建築・古代ガラ  
ス工芸研究者。短期雇用契約で伯爵家執事に収まった。

佐藤と中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。

伯爵家の老家宰スイーツマン・ウルフレザー。奔放な画家で容疑者  
の竹久夢二。群馬の詩人萩原朔太郎。朔太郎の妹萩原愛子。群馬県  
警長尾警部。女郎宿の店主「高崎の老人」隼人。車夫豆吉（土族、  
吉之助）。女郎の菊、殺人事件被害者の黒岩梅。暗殺された阿片商  
人大和屋太。請西藩元藩主林忠崇

### 【本編】

佐藤が、ヨットの舵輪をとる隼人老人と忠崇卿にむかってきた。

「林様、遊撃隊のお話などきかせてくださると幸いです。林様お若いことの武勇伝は、記者仲間から少しきいたことがあります」

「酔狂なことよ」

忠崇卿は遠い目をした。

……

奥州の最南端に磐城国いわきこくというところがある。七つの浜があり、その一つに小名浜おなはまという比較的新しく開かれた港があった。入り江には藤原川が注ぎ込み、大小の船が河口に停泊していた。

遊撃隊士が、船着き場に降りてみると、どこの港にでもある代官所と町屋がある。ただし違うのは、ここに集う荷車やら荷船には石炭が満載されているということであった。石炭は、港の後背を南北に縦断する阿武隈山地の麓に炭層露頭が点在する常磐炭田から集められてきたものだ。

忠崇一行には黒く輝く化石燃料の集積は異様なものに映った。艦隊が帰航した理由は、この石炭の補給が目的だったのだ。

十九歳の青年大名忠崇が隼人に微笑んだ。

「隊士たちをようやく休めさせることができる」

「小田原以来、合戦あつせんづくめだったからな」

遊撃隊が、小名浜おなはま代官所しろにあがりこんで休息していると、一騎の侍が駆けてきて口上を述べた。

……精銳の誉れ高き遊撃隊の皆様が小名浜にご来航なされたとうかがい参上いたしました。できますれば奥羽列藩同盟の戦線に合力していただかんことを願います。同盟は、ささやかながら皆様

に宴の場をご用意いたしました。ぜひともわれらが杯をおつけくださいませ。

宴の場所は、小名浜から二里ほど西にいった湯本温泉郷で、その新瀧しんたきという旅籠が忠崇の陣屋となった。湯に浸かり、芸者の三味線に酔って、朝、目ざめた。そこに、

……官賊かんぞくが平瀉ひらかたの港を奪いました。奪還せねばなりません。遊撃隊の皆様、早速で申し訳ございませんがご出陣願います。

とまた同盟から使者がやってきて口上を述べた。後にいう戌辰ほしんい磐城戦争わきの勃発である。

……

忠崇卿は、一度話を中断して船室におりていき、大輪の花を二つもってきた。蓮はすの花だ。

「頼みがある。二人で蓮をもってもらいたいのだ」

「なにゆえにですか？」

ドロシーが一輪うけとり、サングラスを外した。

「座興じゃ、余も隼人も若いときは戦地をさすらった。極楽にいけるとは限らぬ。地獄に落ちる前に天女というものを垣間みたいとおもつたまで」

そういつて崇崇はもう一輪をシナモンに渡したのだった。

……まさしく天女！

と思ったのは忠崇と隼人だけではない。甲板にいた人々のすべてがそう感じたのだった。

黄金の髪を風にあそばせ、しなやかにのびた腕に蓮花をたずさえ

ている。

「蓮花は泥水をつらぬいて昇華する、ゆえに尊い」  
舵輪をゆっくり回しながら隼人老人がつぶやいた。

## 【後記】

……虎だ、おまえは虎になるのだ！

伝説の「虎の穴」の螺旋迷宮をくだって深層の祭壇に立った。

ぎゃあああああああああああああああ！

我が輩は佐藤である。名前はまだない。

（《どこまでも》つづく）



第1章 「軍艦島」18（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

<http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com/>

挿絵つき

## 第1章 「軍艦島」 18

### 【前回までの粗筋】

1920年代末。群馬県での殺人事件容疑者となった竹久夢二。知人の萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は手分けして捜査を開始。事件関係者を結んでいくと捜査線上に戊辰戦争で活躍した林忠崇という元大名が浮かびあがってきた。榛名湖のヨットで、シナモンたちは林忠崇のもてなしをうけ、戊辰戦争の武勇伝をきかされるのであった。

### 【主要登場人物】

レディー・シナモン……英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォール  
の才媛」の異名がある。

ドロシー・ブレイヤー……米国考古学者。日本古代建築・古代ガラ  
ス工芸研究者。短期雇用契約で伯爵家執事に収まっている。

佐藤と中居……雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。

伯爵家の老家宰スイーツマン・ウルフレザー。奔放な画家で容疑者  
の竹久夢二。群馬の詩人萩原朔太郎。朔太郎の妹萩原愛子。群馬県  
警長尾警部。女郎宿の店主「高崎の老人」隼人。車夫豆吉（土族、  
吉之助）。女郎の菊、殺人事件被害者の黒岩梅。暗殺された阿片商  
人大和屋太。請西藩元藩主林忠崇

### 【本編】

勿来ノ関なほそのせきというのは、古来朝廷が、奥州おうしゅうに根ざす騎馬の民、蝦夷えみし南下をくいとめる最大級の防衛線であった。勿来山とよばれる山塊が海にまで張り出した難所である。

この難所には江戸時代にトンネルが掘削され、奥州磐城国おうしゅう いわきこくから常陸国平潟ひらかたに、荷車を通してやることのできるようになっていた。

トンネルの奪取こそが平潟奪還かなめの要となる。周囲は尾根、谷、雑木といった障害物の多い地形だ。そこに官軍は狙撃兵を布陣させた。

奥羽列藩同盟軍は、二陣に別れて進軍していた。

第一陣は、磐城三藩と呼ばれる地元諸藩を主力にしたもので、直線ルートである山沿いの街道を通って進軍した。

第二陣はやや遠回りである海岸線の間道を通って進軍した。遊撃隊百名も二軍に別れて進軍した。

第一陣に参加した部隊は、長い白兵戦ののち、斬り込み突撃をかけたのだが、意外な敵に進路を妨げられた。

平潟港に停泊していた官軍軍艦富士山丸の存在である。富士山丸は、同盟側陣営に艦砲射撃を加えた。ために、トンネル奪取を目論む奥羽列藩同盟軍の第一陣は、激戦の末に撤退を余儀なくされたのである。

第一陣が後退して、第二陣が前面にたった。主力は仙台藩で総勢五百名に達していた。遊撃隊の後軍である林忠崇隊も加わっていた。

第一陣よりもすこし下がったところなので、艦砲射撃はない。遊撃隊士二十名からなる抜刀隊精鋭が、銃撃戦の絶え間に、斬り込み突撃をかけた。だが、ここでも意外なことが起こった。

背後にいた相馬藩兵はその場に立ちすくんだ。前線で、斬り込み突撃をかけた遊撃隊に友軍は続かず、官軍側狙撃兵の餌食となった。

そのうちに平潟港をでて北に回り込んだ富士山丸が、ふたたび艦砲射撃を加えた。

同盟軍主力をなす奥州一の大藩仙台藩兵は、泰平二百六十年で、侍というよりは役人になってしまった。富士山丸の大砲が鳴ると、後方にいたにもかかわらず、前線にいた林忠崇たちを置き去りにして、我先に、と戦わずして逃げ出したのだ。このような現象を「裏くずれ」という。

最前線に、遊撃隊士二十名がとり残された。

……徳川宗家万歳！

天を仰いだ十九歳、切れ長の青年武將は、一人斬り込みをかけるべく愛馬の栗毛にまたがり抜刀した。

## 【後記】

螺旋階段がたどりついた先には、地底宮とでもいうべき世界があった。億万のろうそくが立ち並ぶ祭壇。そこにいてこちらを振り返った者は……。

(《どこまでも》つづく)

第1章 「軍艦島」19（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

<http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com/>

挿絵つき

## 第1章 「軍艦島」 19

### 【前回までの粗筋】

1920年代末。群馬県での殺人事件容疑者となった竹久夢二。知人の萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は手分けして捜査を開始。事件関係者を結んでいくと捜査線上に戊辰戦争で活躍した林忠崇という元大名が浮かびあがってきた。榛名湖のヨットで、シナモンたちは林忠崇のもてなしをうけ、戊辰戦争の武勇伝をきかされるのであった。平瀧攻略線で、遊撃隊後軍隊長忠崇は前線に取り残されていた。忠崇の運命やいかに――。

### 主要登場人物

？レディー・シナモン：英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。？ドロシー・ブレイヤー：日本古代建築・ガラス工芸の研究者で伯爵家執事。？佐藤と中居：雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。？スイーツマン・ウルフレザー：伯爵家の老家宰。？竹久夢二：殺人容疑者の画家。？萩原朔太郎：依頼人で群馬県の詩人。？萩原愛子<sup>はぎわら あいこ</sup>：朔太郎の妹。？長尾警部：群馬県警警部。？「高崎の老人」隼人：土族出の女郎宿店主。？豆吉（吉之助）：土族出の車夫。？菊：豆吉と失踪した女郎。？黒岩梅：殺人事件被害者。？大和屋太<sup>やまとや ふとし</sup>：麻薬商人。？林忠<sup>はやした</sup>崇<sup>ただか</sup>：無爵華族で請西藩の元藩主。

### 【本編】

水蒸気をふくんだ空は青を淡くした色だ。雲まで霞んだ感じた。  
勿来山の山裾が海に突きだした岬から、官軍側の蒸気船富士山丸の砲弾が規則正しくこちらに飛来しては炸裂し、岩盤と土砂を弾き飛ばしていた。

勿来海岸と呼ばれる長い浜沿いに、官軍勢は、じわじわ、と間を詰めてくる。

走り駆けた馬の手綱にくらいついたのは隼人である。

そこに遊撃隊の幹部たち、隊士たちがつぎつぎにしがみついていた。

――殿が犬死になされたら、徳川宗家の再興は誰がなさるのか！

人山が馬をとめた。そのとき、おぞましいばかりに砲弾を撃ち込んでくる富士山丸に、砲弾が飛んできてマストを吹き飛ばした。

隊士たちは口々に、

――なつ、なんだ。同士討ちか？ 誤爆か？

と叫んだ。

富士山丸が、弾丸を飛ばしてきた相手は、勿来海岸のはるか北方にいるようだ。同盟軍は逃げ散って軍勢などみえない。

富士山丸はそこに報復砲撃を加えた。――のだが全弾が外れた。さらに北から飛来したもう一発が甲板を貫き、砲弾火薬を誘爆させ、戦闘不能状態に陥ったのである。

堪らず富士山丸は反転し平潟港に逃げかえった。

忠崇は、富士山丸を撃退した砲弾を撃ち込んだ方角を拝して、摩

下二十名の隊士に下知した。

……天佑だ。これよりわれらは、第一陣に参加した遊撃隊前軍の救援にむかう。続けーっ！

……応ーっ！

隊士たちは白い歯をみせて、浜に植え込んだ松の防砂林に駆け込んだ。

遊撃隊を救ったのは、第二陣に加わっていた山田省吾という地元平藩士だった。友軍が逃げ散るのを後目に、一人残って七ポンド山砲で応戦したのである。

痛快な逆襲を成功させたこの男は、戊辰磐城戦争の最終防衛拠点である平城が陥落するとき、市街戦のなかで討ち死にしたときく。少ないながらも、同盟軍にも侍はいたのだ。

……ここで第二陣の仙台藩兵が反転し、逆襲してきたら。

官軍が一瞬ひるんだ。

……千載一遇。

遊撃隊は、忠崇率いる後軍が、前線の松林で孤立している前軍を援護射撃し、前軍が呼応して退いてくると歩調を緩めながら少しずつ後退する戦術をとった。

松林を北に抜けた浜街道で、遊撃隊前軍二十名が、後軍二十名と奇跡的に合流することに成功。隊士は四十名に回復した。



だが新式銃で武装した官軍勢は数百あり、仙台兵が逆襲してこないこと、遊撃隊が寡兵であることを知って、雪崩をうって追撃してくる。

遊撃隊士は、敵が銃弾をとばすなかを、反撃しては引く、ということを繰り返しながら撤退し、新田峠しんでんとうげというところでどうにか敵を振り切った。

夕刻、坂道をのぼる遊撃隊士たちは歓声をあげた。殿しんがらにいた隼人が馬上の忠崇に、

「やつ、やりましたなーっ、殿！」

と声を弾ませると、忠崇もはにかんでみせた。

新田峠は、街道最大の難所で、そこに後退した同盟軍が集結していたのだ。

古来より、撤退戦術ほど難しいものはないとされる。包囲をされながら、麾下をパニックにさせずに志気を保ち、十倍する敵とわたりあいながら、帰還に成功した遊撃隊と、十九歳の武将がもつ才覚・胆力に、同盟軍の誰もが舌を巻いた。

## 【後記】

「あつ、先輩じゃないっすか！」

「中居か、どうしたんだ、その姿は……」

（《どこまでも》つづく）

.

第1章 「軍艦島」20（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

<http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com/>

挿絵つき

## 第1章 「軍艦島」 20

### 【前回までの粗筋】

1920年代末。群馬県での殺人事件容疑者となった竹久夢二。知人の萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は手分けして捜査を開始。事件関係者を結んでいくと捜査線上に戊辰戦争で活躍した林忠崇という元大名が浮かびあがってきた。榛名湖のヨットで、シナモンたちは林忠崇のもてなしをうけ、戊辰戦争での忠崇と遊撃隊が奇跡の生還をしたエピソードを知る。

### 【主要登場人物】

?レディー・シナモン：英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。 ?ドロシー・ブレイヤー：日本古代建築・ガラス工芸の研究者で伯爵家執事。 ?佐藤と中居：雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。 ?スイーツマン・ウルフレザー：伯爵家の老家宰。 ?竹久夢二：殺人容疑者の画家。 ?萩原朔太郎：依頼人で群馬県の詩人。 ?萩原愛子はぎわら あいこ：朔太郎の妹。 ?長尾警部：群馬県警警部。 ?「高崎の老人」隼人：土族出の女郎宿店主。 ?豆吉（吉之助）：土族出の車夫。 ?菊：豆吉と失踪した女郎。 ?黒岩梅：殺人事件被害者。 ?大和屋太やまとや ふとし：麻薬商人。 ?林忠はやし た崇ただか：無爵華族で請西藩の元藩主。

### 【本編】

翌日、軍艦島でおきた事件の所轄、高崎警察署にふたたびシナモンの一行が足を運んだ。拘留室の前までドロシー博士が同行し、他の連中は玄関口待合室に陣取っていた。

ドロシーは、前回、夢二に平手打ちを食らわせているので、萎縮して事情聴取に支障がでるものと判断し、シナモンに対応をまかせ、自身は少し離れた通路に控えていることにした。

のぞき窓のむこうにいる画家はB5サイズのスケッチブックに鉛筆でなにかを描いていて、こちらには気づかない。心なしか以前よりやつれているように思われる。

重厚な扉が開くと、白いドレスの若い貴婦人があらわれ、蓮花を囚人にさしだした。蓮花は忠崇卿から贈られたものだ。

「夢二さん」  
うつろな目をした痩せた男が顔をあげると、花を受け取ってから、ようやく思い出したかのように、笑みを浮かべたのだった。

「僕の無実は証明できそうですか？」

「ええ順調ですわ……ただ、決定的な証言か物証が必用です」  
シナモンはさらに続けた。

「高崎の老人 と呼ばれる隼人という方をご存じですか？」

シナモンは、これまで知り得た情報を夢二に説明した。

「隻眼の老人ですね……地元では知らない人はいませんよ。街を歩いているのをみかけたことがあるくらいで、お付き合いはないし、恨まれるようなこともないですよ」

「林忠崇卿は？」

夢二はまた首を横に振った。

「では、殺された黒岩梅様のご家族の方についてです」  
シナモンは、ドロシーが入手した黒岩梅の戸籍謄本を夢二にみせた。

「梅様は前橋藩藩士の孫娘です。幕末に徳川家存続のために蜂起した遊撃隊に参加なされています。梅様は私生児でした。御父君をご存じですか？」

「梅の実父ですか……」

夢二は、拘置室の天上をしばらくみてから答えた。

「大和屋太やまとやぶとしとか……。たしか妹も。子供のときに養女にださせてそのまま生き別れになった、菊とかいう……」

黄金の髪をした若い貴婦人の瞳の奥に、鉱物質の閃くものがあった。そう、サファイアのような冴えた輝きだ。

大和屋太……警察署待合室に控えていたシナモンの取り巻きの中にいた佐藤が知っていた。先日、東京で暗殺された麻薬王である。

菊は、高崎の老人 隼人のところの女郎だ。車夫豆吉こと吉之助と逃亡中ということになっている。

## 【後記】

「なつ、中居一つ、よつ、よりによって犬に……」

「先輩こそ、猫になつていないじゃないっすか！」

祭壇には巫女もいた。巫女が振り向いた。

「二人とも、人間にもどりたい？……じゃ、私の願いをかな

えて」

巫女は嘲笑した。

佐藤は、（あっ、雪男のメス）という言葉を喉元までだして、我に返り、口を押さえたのであった。  
びゅるる……。。

（《どこまでも》つづく）

第1章 「軍艦島」21（前書き）

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

<http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com/>

挿絵つき



## 第1章 「軍艦島」 21

### 【前回までの粗筋】

1920年代末。殺人事件容疑者となった竹久夢二。知人の萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、レディー・シナモンに捜査を依頼する。シナモンの一行は捜査を開始。事件関係者を結んでいくと捜査線上に戊辰戦争で活躍した林忠崇という元大名が浮かびあがってきた。再度シナモンが拘置中の夢二に面会すると、夢二の口から意外な背後関係が浮かび上がってきた。殺害された黒岩梅と女郎の菊が姉妹で、しかも暗殺された麻薬王大和屋太の娘であることが判ったのだ。

### 【主要登場人物】

?レディー・シナモン：英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。 ?ドロシー・ブレイヤー：日本古代建築・ガラス工芸の研究者で伯爵家執事。 ?佐藤と中居：雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。 ?スイーツマン・ウルフレザー：伯爵家の老家宰。 ?竹久夢二：殺人容疑者の画家。 ?萩原朔太郎：依頼人で群馬県の詩人。 ?萩原愛子<sup>はぎわら あいこ</sup>：朔太郎の妹。 ?長尾警部：群馬県警警部。 ?「高崎の老人」隼人：土族出の女郎宿店主。 ?豆吉（吉之助）：土族出の車夫。 ?菊：豆吉と失踪した女郎。 ?黒岩梅：殺人事件被害者。 ?大和屋太<sup>やまとや ふとし</sup>：麻薬商人。 ?林忠崇<sup>はやした だたか</sup>：無爵華族で請西藩の元藩主。 ?オットー・スコルツェニー：後に「ヨーロッパ一危険な男」と称されるオーストリーの青年。

【本編】

拳銃で馬の商標があるのはアメリカ、コルト社の製品だ。M  
1908 .ポケット25 はコルト社最小の拳銃である。

25口径、弾丸は6発。使用弾丸は25ACPといい、火薬量が  
少なく殺傷力は低いため、護身用に適している。黒光りした銃身に  
は、シリアル番号が刻印され、文字をつる草の黄金意匠が囲ってい  
て美麗である。

ホテルとは名ばかりで実質は旅館だ。帳場がカウンターになっただけのことではないか。ロビーは板敷きで、スリッパを履くことになっている。客室は和室だ。扉に鍵がついているため、一応、プライバシーが保てるようになっていたという点だけは、ふつうの旅館とは違う。

実家が前橋にある朔太郎兄妹以外のレディー・シナモンの一行は、高崎のホテルに泊まった。

夜遅く、伯爵家家宰ウルフレザーが、執事ドロシー・ブレイヤー博士の部屋を訪ねた。

「使わずにすむといいのですが……」

「そうですね。でも、備えは重要ですよ」

博士は、家宰がいても、かまわず銃の手入れを続けた。

「高崎の老人」こと隼人をして、「アメリカの女侍」といわしめさせたドロシー博士は、ポケットサイズの拳銃を化粧ケースに収め、ケースをさらにシヨルダーバックにいれて持ち歩いている。

少しして、扉がノックされた。廊下から番頭が声をかけてきた。

「あのお、ドロシー様、お電話ですよ」

「誰から？」

「オットー・スコルツェニー様……と名乗られましたが……」

……スコルツェニー？

博士と家宰が顔を見合わせた。

### 【後記】

スイーツマンの部屋である。猫と犬が暖炉の前で寝そべっていた。

「おい中居、野菜くわんといかんぞ」

「先輩、俺たち肉食獣ですよ」

人間であったときの感覚が錯綜する佐藤であった。

（《どこまでも》つづく）

第1章 「軍艦島」 22 (前書き)

アルファポリスミステリー大賞応募作品

『伯爵令嬢シナモン』シリーズ1～3部

第3部『修道院島』はこちらで完結しております

<http://r24eaonh.blogspot35.fc2.com/>

挿絵つき

## 第1章 「軍艦島」 22

### 【前回までの粗筋】

1920年代末。殺人事件容疑者となった竹久夢二を救うため知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、シナモンに捜査を依頼。シナモンが事件関係者を結んでいくと捜査線上に戊辰戦争で活躍した林忠宗という元大名が浮かびあがってきた。忠宗との面会后、シナモンが、高崎警察署で拘束されている夢二に面会すると、夢二は意外な背後関係を口にした。殺害された黒岩梅と女郎の菊が姉妹で、しかも暗殺された麻薬王大和屋太の娘であるというのだ。事情聴取後、一行は高崎のホテルに宿泊した。深夜、ドロシーに電話があった。電話の主は、あのスコルツェニーだった。

### 【主要登場人物】

?レディー・シナモン：英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。 ?ドロシー・ブレイヤー：日本古代建築・ガラス工芸の研究者で伯爵家執事。 ?佐藤と中居：雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。 ?スイーツマン・ウルフレザー：伯爵家の老家宰。 ?竹久夢二：殺人容疑者の画家。 ?萩原朔太郎：依頼人で群馬県の詩人。 ?萩原愛子はぎわら あいこ：朔太郎の妹。 ?長尾警部：群馬県警警部。 ?「高崎の老人」隼人：土族出の女郎宿店主。 ?豆吉（吉之助）：土族出の車夫。 ?菊：豆吉と失踪した女郎。 ?黒岩梅：殺人事件被害者。 ?大和屋太やまとや ふとし：麻薬商人。 ?林忠はやした宗ただか：無爵華族で請西藩の元藩主。 ?オットー・スコルツェニー：後に「ヨーロッパ一危険な男」と称されるオーストリーの青年。

【本編】

二階の客室から降りると、電球一個だけが一階カウンターを照らしているのが目にはいる。電話はカウンターにあるものが唯一だ。

ドロシーが受話器をとると、一緒にきた家宰はロビーに腰をおろし、気を利かした番頭が席を外した。

ご機嫌いかがドロシーさん。

ミスター・スコルツェニー、ご用件は？

忠告です。前橋憲兵分隊が動き出しますよ。もうこのへんで夢二氏に関わるのはおよしなさい。

憲兵？ 民間での殺人事件ではないですか？ なぜ軍が？

受話器の向こう側の青年が失笑した。

ドロシーさん、だってあなたは、アメリカ陸軍参謀本部の代理<sup>ジェント</sup>人じゃないですか。考古学者と、イギリス名門伯爵家執事の肩書きを、隠れミノにしていますけれどね。日本当局だってボンクラばかりではないのですよ。

詳しいですね、ミスター・スコルツェニー。さしずめあなたも、どこぞの国の代理人。ご親切ついでにうかがいますよ。……しがない画家の殺人事件に、憲兵が動く、という背景。なにより、私たちに忠告する理由を教えてくださいとね。

背景？ そんなあ。ははは、人が悪いなあ。職務上いえるわ

けないでしょう。……忠告の理由ですか？ 単純ですよ、レディー・シナモンのファンだからです。

通話はそこで途切れた。受話器を置いたドロシーは、様子をうかがっている家宰に首をすくめてみせた。

### 【後記】

ビクトリア様式の部屋は、奥に暖炉を置き、床をカーペットで覆い、家具を置く。家具は部屋の持ち主の好みでトッピングしていく。センスこそがすべてだ。

窓の外は雪。二人の男が、ちろちろ、と燃える暖炉の薪をみつめていた。

「中居、恋をしたことはあるか？」

「人並みつてところですね」 中居は佐藤の横顔を、ちらつ、とみてからききかえした。「どうしたんすか、先輩？」

佐藤ははにかんだ。

「1本くれ」

「どうぞ……」

「いつも悪いな」

暖炉の前に、猫と犬がすわっていた。猫がくわえたのは、骨の形をしたペット用ガムである。

（《どこまでも》つつく）

## 第1章「軍艦島」 23

### 【前回までの粗筋】

殺人事件容疑者竹久夢二を救うため知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、シナモンに捜査を依頼する。捜査の結果、女郎宿の店主で？高崎の老人？と呼ばれる隼人、戊辰戦争の大名戦士林忠崇が何らかの形で事件にからんでいること。また、第一の事件被害者である黒岩梅と女郎の菊が姉妹で、しかも暗殺された麻薬王大和屋太の娘であることも判ってきた。高崎のホテルに宿泊したドロシーのもとに謎めいたオーストリー青年スコルツェニーから電話があり、「事件から手を引け」と忠告される。ドロシー博士は米国陸軍参謀本部エージェントであった。

### 【主要登場人物】

？レディー・シナモン：英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。　？ドロシー・ブレイヤー：日本古代建築・ガラス工芸の研究者で伯爵家執事。　？佐藤と中居：雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。　？スイーツマン・ウルフレザー：伯爵家の老家宰。　？竹久夢二：殺人容疑者の画家。　？萩原朔太郎：依頼人で群馬県の詩人。　？萩原愛子はぎわら あいこ：朔太郎の妹。　？長尾警部：群馬県警警部。　？「高崎の老人」隼人：土族出の女郎宿店主。　？豆吉（吉之助）：土族出の車夫。　？菊：豆吉と失踪した女郎。　？黒岩梅：殺人事件被害者。　？大和屋太やまとや ふとし：麻薬商人。　？林忠はやした だたか 崇：無爵華族で請西藩の元藩主。　？オットー・スコルツェニー：後に「ヨーロッパ一危険な男」と称されるオーストリーの青年。



もう一度、軍艦島に戻ってみましょう。

そうシナモンがいうので、一行は事件の発端となった中洲にまたやってきた。深縁の帽子を被った若い貴婦人が、

遺体が置かれた絶壁の上にある平場。その茂みの様子もみさせてもらえないものでしょうか。

というので、佐藤と中居は近くの農家から梯子を借りてきて崖にかけた。

家宰が咳払いをすると、佐藤が号令した。

「男子一同、回れ右！」

朔太郎が島に向かって背を向けるタイミングが、少し遅れた。中居が袖を引つ張る。佐藤が恐ろしい形相で朔太郎をにらんだ。

利根川で削られた中洲？軍艦島？。水面からは三メートルほどの高さで、一部は川原とつながっている。露払いにドロシーが梯子をのぼり、シナモンがあとに続いた。シナモンはスカート姿だ。愛子は佐藤が怒ったわけを理解した。

シナモンが、平場に立つと、景觀を一望し、犯人が黒岩梅の遺体を島まで運ぶ様子をイメージしてみた。

島から下を眺めてみる。犯人はエンジン付きのボートを下流からやってきて、川原に上陸。ついで、島の崖上まで、遺体を担ぎ上げてのぼりきり、そこに放置してから立ち去った。

崖をのぼるときは夢二が登ったときのように、ツタにつかまって

登ったのだろうか？ 梯子を使った可能性は？ 島の裏側に船を停泊させ、先発して何人かが島に上陸。縄梯子を降ろし、遺体をついできた男はそれを使って利根川の岸部側から上陸する。……何故に手の込んだことをするのか。簡単だ。要は夢二を犯人に仕立てるのが目的なのだから。

ドロシーははうような姿勢で、下草をのぞいてると、しばらくして、赤い布切れをみつけた。

群馬県庁のある前橋城址土塁の北に二人の男が歩いていた。一人は煙草をふかしたスーツ姿の男。もう一人は将校のようだ。

「レディー・シナモン。リザード伯セル家の令嬢だ。一門にはイギリス政府要人ばかりか、欧州各国政府要人にも親族が多いときく。手荒に扱えば、こちらが手痛い目に遭うということをお頭にいれとけよ」

スーツ姿の男がいうと、将校は野卑な笑みを浮かべた。

「忠告ですか、甘粕さん。あなたにそんなことをいわれるとは。行方不明という手があるのですよ。行方不明者ですから、途中経過がどうあるかと問題など生じるはずなどないでしょう」  
将校は舌なめずりをしている。

## 【後記】

にゃん。  
わん。

「どうしたね、佐藤さんに中居さん？」

猫パンチ。  
がぶり。

ぎゃっ。

（ちよっとお休みしてたからって、怒るなよ）

## 第1章 「軍艦島」 24

### 前回までの粗筋

殺人事件容疑者竹久夢二を救うため知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、シナモンに捜査を依頼。捜査線上には、女郎宿の店主？高崎の老人？隼人、戊辰戦争の大名戦士林忠崇が浮かび何らかの形で事件にからんでいる。また、第一の事件被害者である黒岩梅と女郎の菊が姉妹で、しかも暗殺された麻薬王大和屋太の娘であることも判った。高崎のホテルに宿泊したドロシーのもとに謎めいたオーストーリー青年スコルツェニーから電話があり、「事件から手を引け」と忠告される。ドロシー博士は米国陸軍参謀本部エージェントであった。事件を追跡するシナモンを、日本陸軍前橋分隊が密かに忍び寄ってきた。

### 主要登場人物

？レディー・シナモン：英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。？ドロシー・ブレイヤー：日本古代建築・ガラス工芸の研究者で伯爵家執事。？佐藤と中居：雑誌『東京倶楽部』の記者とカメラマン。？スイーツマン・ウルフレザー：伯爵家の老家宰。？竹久夢二：殺人容疑者の画家。？萩原朔太郎：依頼人で群馬県の詩人。？萩原愛子はぎわら あいこ：朔太郎の妹。？長尾警部：群馬県警警部。？「高崎の老人」隼人：土族出の女郎宿店主。？豆吉（吉之助）：土族出の車夫。？菊：豆吉と失踪した女郎。？黒岩梅：殺人事件被害者。？大和屋太やまとや ふとし：麻薬商人。？林忠はやした宗ただか：無爵華族で請西藩の元藩主。？オットー・スコルツェニー：後に「ヨーロッパ一危険な男」と称されるオーストーリーの青年。？甘粕正彦：元憲兵大尉。後に「満映」理事長となり、スパイ組織「

「甘粕機関」を立ち上げる。

「軍艦島？の崖上にいたレディー・シナモンが、ハンドバックから、以前、近くで拾った石器のかけらを取り出し太陽にかざすと、きらきら、と輝いた。ドロシー・ブレイヤーはまぶしそくに、

「事件と何の因果が？」

「いえ、脈絡などあるはずがない。不思議な石、興味をひくけれど……製鉄のときにでる不純物の塊？鉄滓

？なのに石器加工がなされている」

ドロシー博士は、首をひねってから、目を丸くした。

「鉄器時代の石器？」

「いえ、待つて

なんてこと。これって、隕

石だ！

新石器時代人が隕石を加工して石器にしたんだ！」

パラサイト（pallasite）、石鉄隕石の一部。

深縁の帽子を被った若い貴婦人がガラス製の石器をサングラスをかけた女性考古学者に手渡した。

地球型惑星や月型衛星は、金属核、マントル、地殻で構成される。金属核部分の鉄または鉄・ニッケル合金、マントル部分の鉄と岩石の混合物、地殻部分の岩石となる。

三層構造となるのは、比重の重い鉄が中心にくるからだ。岩石は珪酸質でできている。珪酸質を透明にしたのがガラス。こういった天体同士が衝突して砕けたのが隕石だ。

天体の中心にあった鉄は隕鉄、マントル部分の鉄と岩石からなる混合物は石鉄隕石、地殻部分の岩石は石質隕石となる。

利根川「軍艦島」を初めて訪れたシナモンが拾った石器は、ガラス質の石鉄隕石だった。

## 後記

「先輩、スイーツマンが、『シナモン』執筆を？おさぼり？してましたね」  
「鉄槌をくださねば」

### 奇門遁口の陣。

疾走した二匹の獣が宙を舞い、獲物の左右から食らいついた。

見切った。

スイーツマンが両手に持っていた分厚い書籍に、犬と猫が頭を強くぶちつけ、床に崩れ落ちていく。男はそこでしたりと笑みを浮かべるのであった。

## 第2章 「修道院島」 1

### 前回までの粗筋

殺人事件容疑者竹久夢二を救うため知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、シナモンに捜査を依頼した。単なる朔太郎個人の女性問題による殺人事件ではなく、背後に組織的な存在があるらしいことが判ってきた。

### 主要登場人物

？レディー・シナモン：英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。？ガートルート・ローザン・ベル：英国の冒険家・考古学者・政治家。？スイーツマン・ウルフレザー：伯爵家家宰

ここで、日本の？軍艦島？における殺人に遡る四年前の物語をしなくてはならない。

イングランド島西部、コンウォール半島の先端にある港町リザード市。リザード伯爵領である。市街地の東を南流し、ドーバー海峡に注ぐリザード川を遡っていくと、？修道院島？という中洲にたどり着く。

川の中に瘤状こぶに取り残された岩盤に土砂がひっかかり、三か月形

の島になっている。

修道院島の由来は、まず古代ローマ人が、島に砦を築いたことに始まる。ローマ人が退去した後、ケルト人系の中世コンウォール王国が跡地を修道院に改装したのだが、バイキングの襲撃をうけて、焼かれ、以降は再建されることなく放棄された。

島と川は、伯爵家の所有地となっており、専ら釣り場や狩猟地として使われていた。ふだんは島にあるバンガロウ風の別邸を管理する男しかない。

風の妖精シルフィーはいつも大西洋からふいているのだけれども、夏のひとときは気まぐれを起こすこともあるらしい。

十四歳になったばかりのレディー・シナモンは、サー・アーネスト・サトウト、T・E・ロレンスの推薦を受けて、修道院付設校から、オクスフォード大学に進学していた。

前年、カンカン帽を被っていた少女は、優美な黄金の髪を後に結わえて、故郷に帰ってきた。黄金の髪を深縁の帽子で隠し、自らが操るヨットで、？修道院？島にやってきた。

先着の小型蒸気船がすでに栈橋に横付けされていた。出迎えたのは島の管理人、庭師の老夫婦と孫、そしてウルフレザー家宰である。

シナモン、ここが？修道院島？遺跡ね。

先端に立ち、ヨットを操る黄金の髪を後に結わえた若い貴婦人を振り返ったのは、ガトルート・ローザン・ベルという女性で。煙草



を手放せず絶えずふかしている五十を過ぎた冒険家だ。

シナモンが伯爵家の人々にベルを紹介すると、ベルははにかんで全員と握手を交わしたのだった。

## 後記

部屋の壁を猫と犬が蹴り、X字に宙を舞った。そこへ、スイーツマンが入ってきた。

「佐藤、中居、またらくでもないことを考えていたな？」

秘密特訓を知られてしまった。中居、練り直した。

了解つす、先輩。

だだだだだだ……。

## 第2章 修道院島2 (前書き)

### 前回までの粗筋

殺人事件容疑者竹久夢二を救うため知人萩原朔太郎は、佐藤記者を介して、シナモンに捜査を依頼した。単なる朔太郎個人の女性問題による殺人事件ではなく、背後に組織的な存在があるらしいことが判ってきた。そして第二章、舞台は四年前の英国、シナモンの故郷コンウォール州リザード市へ。

### 主要登場人物

？レディー・シナモン：英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。？ガートルート・ローザン・ベル：英国の冒険家・考古学者・政治家。？スイーツマン・ウルフレザー：伯爵家家宰。

## 第2章 修道院島2

？修道院島？は南北三〇〇フィート（二七〇メートル）、東西五〇フィート（四五メートル）で、三日月形となっている。

波止場とバンガロウは、細長い島の北端に位置している。そこから南へ、砂浜のようになっていいる川縁を歩いていくと、島の胴部はやや太くなつて、奥は深い森となる。

さらに南へ歩くと、島はまた細くなつていって南端となり、岩塊上に建てられたロマネスク様式の修道院にたどり着く。

修道院は石と煉瓦で築かれ、屋根は落ちて壁だけが残されていた。岩塊の麓から修道院を見上げた往年の考古学者は立ち止まり、若い貴婦人を後目に、流暢なアラビア語で、中世イスラムの詩を吟じ涙を浮かべた。

足をとめ泣こう。愛しき君の面影と、流砂の谷にある思い出の地をしのんで。

「イムルー・アルカイスの二連句カフレットですね？」  
ベルは、「ほう」と呟きさらに、

「？聖戦？（ジハード）のあと、荒廃した野営地の跡を旅のイスラム戦士が再び訪れたとき、戦陣で慰めてくれた眼前にはいない恋人の歌姫を思い出す　という？ムアッラカート詩？の冒頭？アットラール？　を知っているなんて……？コンウォールの才媛？の異

名をとるだけのことはあるわ」

と加えてから、煙草に火をつけた。

ベルは瞳を閉じて娘、いな、孫ほども離れたシナモンに、こんな注文をした。

はじめて遺跡に立つときは、景観を観察しなさい。そして往事の姿をイメージするのです。

ローマ帝国が砦を築いたときの？修道院島？は今見上げている岩塊くらいしかなかった。

修道院が建てられた中世になると島は現在の半分ほど伸びた形状となる。現在ぶな（オーク）の繁る森も往事は、修道士たちの墓地で、林檎園となり、日溜まりには、薬草<sup>ハーブ</sup>が植えられていた。

「さあ、はやいところ修道院跡をまわってきましょう。？ティー・パーティー？に間に合わなかったりしたら、バンガロウにいる家宰さんに叱られるでしょうからね」

煙をふいてから片目をつぶってみせたその人は、シナモンが知る限り最高の教師であった。

## 第2章 修道院島2 (後書き)

### 後記

崖の上に立つ獅子と狼。身を潜め、無防備な獲物が峡谷をすり抜けてくるところを待つ。

例の如くスイーツマンがやってきた。

「あのなあ、佐藤、中居。何度もいうけど、テーブルの上に登るのだけはやめてくれよ」

見破られたぞ、中居。撤収だ。

了解つす、先輩！

だだだだだ……。

猫と犬の二匹が、口髭の男をかすめて、ドアの外に逃げていく。

修道院島3 (前書き)

著作権関連は各種法令・条例に基づく。

## 修道院島3

### 前回までの粗筋

日本にきて早々、殺人事件容疑者竹久夢二を救うための捜査をするレディー・ナモン。そして第二章、舞台は「軍艦島」の事件から四年遡った英国、シナモンの故郷コンウォール州リザード市。飛び級により大学生となった十四歳の貴婦人は、師G・L・ベルを古代ローマから中世にいたる遺跡「修道院島」に案内していた。

### 主要登場人物

？レディー・シナモン：英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。？ガートルート・ローザン・ベル：英国の冒険家・考古学者・政治家。？スイーツマン・ウルフレザー：伯爵家家宰。

岩塊となった丘には切り通しがあって、坂道となっている。やがて頂きにたどりつくと、壁だけとなった修道院礼拝堂にたどりつく。礼拝堂は西を正面とし、両側には塔の基部が残存し、内部にはおびただしい瓦礫が散っている。建物跡の中央に立って、気をつけて壁をみると、天井を支えた痕跡があり、それが平天井であったことが理解できる。

ロマネスク様式は、九世紀から十一世紀に盛行した教会建築様式だ。主体となる礼拝堂は、西を正面とし、二つの塔を両脇に配している。石造の壁面、天井と屋根を木造とする平天井バシリカが特徴となる。

ロマネスク様式が流行した時代は八世紀から十一世紀に活潑化した、ヴァイキングの時代と重なっている。

バイキングとはスカンジナビア半島を根拠としたゲルマン系民族のことで、スエーデンのスヴェニア人、ノルエーのノルマン人、デンマークのデーン人で構成される。

卓越した航海術、鉄器技術で欧州各国を圧倒し、フランス北部ノルマンジー公国、イングランドにおけるノルマン朝、ロシアにおけるキエフ公およびノブゴロド公国、イタリアにおけるシチリア王国を築き、アイスランド、グリーンランド、カナダを結んだ植民地をも築いていた。

初老のベルが、若いシナモンに、崖から遠望できるリザード川を指さしていった。

「往事は概して貧しく、富が集積される場所は限られていて、教会はもつとも無防備で莫大な富が集積される場所だったのよ。さあ、イメージしてみてください」

修道院のあった岸部には、かつて港町が存在し大小の商船が修道院島の周囲を行き交っていた。

商船は帆船で、大小あり、岸部に接岸されて、積み荷が積み降ろしされて、多くの人で賑わっている。町には市場を中心に、藁葺き屋根の家屋、商人の屋敷、代官の館が建ち並び、周囲を木柵で囲んでいる。

ところが、十世紀ごろ、櫂のついた一本マストの？ロングシップ？



に乗ったヴァイキングたちが突如現れて、港町を襲い、修道院を略奪して火をかけた。

積み上げられた知識が、ドキュメンタリーのようにシナモンのなかで映像化されていく。

丸い盾、戦斧、牛の角がついた兜を被ったヴァイキングが襲いかかり港町が炎上する。シナモンは修道院最後の情景を思い浮かべた。

島には逃げ場はない。修道士たちは礼拝堂に立て籠もって祈りを捧げていたことだろう。重厚な扉をぶち破ったヴァイキングたちは、修道士を斬り、宝物を奪っていったに違いない。

(礼拝堂には何が置かれていたのだろうか?)

ごく素朴な疑問がわいてきた。

## 後記

「お茶の時間だ」といって、スイーツマンが部屋に入ってきた。このとき、床に何か落ちてきて、大きな音をたてた。

「中居、根性が足りんぞ」

「いいよなあ、先輩は猫で。俺は犬っすよ。自分を褒めてやりたいっすよ！」

天井からまた別の塊が落ちた。猫だ。そいつが、スイーツマンの

頭を踏んづけて外に飛び出していった。

「佐藤！」

猫の後を犬が追いかけて逃げた。

「待ち伏せコウモリ作戦」失敗。

だだだだだ……。

## 第2章 修道院島4（前書き）

著作権に関しては各種法令・条例に準ずる。

## 第2章 修道院島 4

### 前回までの粗筋

日本にきて早々、殺人事件容疑者竹久夢二を救うための捜査をするレディー・ナモン。そして第二章、舞台は？軍艦島？の事件から四年遡った英国、シナモンの故郷コンウォール州リザード市。飛び級により大学生となった十四歳の貴婦人は、師G・L・ベルを古代ローマから中世にいたる遺跡？修道院島？に案内していた。

### 主要登場人物

？レディー・シナモン：英国伯爵令嬢・考古学者。「コンウォールの才媛」の異名がある。？ガートルート・ローザン・ベル：英国の冒険家・考古学者・政治家。？スウィツマン・ウルフレザー：伯爵家家宰。

伯爵家別邸のバンガロウは、頑丈に組まれた石積礎石の上に建てられている。二階建ての建物で、素朴な石積み の 塀 に 囲 ま れ、 中 に は いる ときは、 屈曲した階段をくぐり抜け、薔薇のアーチをくぐっていくのだ。

いったい盛りのころはどれほど華やかなのだろう、少し季節を逸してはいるが、小庭には薔薇を中心とした花々があった。

レディー・シナモンが「修道院島」に上陸して二日目は雨であった。降り は 激 しく、 作業は中断した。川の水かさはやや増して勢いがあ

る。

伯爵家の人々は翌日の作業に備えて道具を整備して、余った時間でバンガロウ内装の手入れをしたり、波止場を巡回したりしていた。

初老の冒険家ベルと、シナモンは持ち込んだ文献を読みあさっていた。レポートのメモをつくっているのだ。二人が持ち込んだ書籍の中に、『コンウォール年代記』がある。著者はガヘリスといい、現地の司祭で、「修道院島」にいた。

ガヘリスは、ヴァイキングに破壊される以前の修道院島の様子を克明に描写していた。

礼拝堂内部には、「聖石」があった。「聖石」はエジプトのアレキサンドリアから渡来したものだ。半透明乳白色、拳大の大きさをし、小さな気泡がおびただしい数みられる。虫の形に彫刻され、甲殻の背には、十字架が浮き彫りされていた。

修道院陥落の直前、修道院長は、修道士ケイと私を呼びつけて？聖石？を託し落ち延びるよう命じられた。すでに対岸の港町は炎上していた。

私たちは小舟をつないだ船着場に向かい乗り込もうとしたとき、ヴァイキングたちの？ロングシップ？に見つかることとなり、矢が射かけられた。

小舟が動き出した。矢は、？聖石？をもった修道士ケイの胸を貫いて、？聖石？ごと、ケイを水面に落とした。私は、死んだふりをし

たまま動かずに舟底に横たわって難を逃れた。

危険が遠のき、半身を起こして振り向いたとき？修道院島？は炎上していた。助かった修道士は私だけだった。

修道院長以下仲間たちは、礼拝堂に立て籠もるといつていた。おそらくは彼らはそこで最後のときを迎えたのだろう。

ヴァイキング来襲後、何度か地元内外の人々が？聖石？を引き揚げようとしたが、みつからず、未だ川底に眠っているのだ。

つぎの煙草をケースから取り出しながら、初老の女性冒険家が、黄金の髪を後に結った若い貴婦人に質問した。

「エジプト起源の『聖石』、虫の形をしている。乳白色で気泡がある。シナモン、何かを連想しないこと？」

「リビア石のスカラベ。古代エジプトの宝石。十字架は中世になってから再度、彫られたもの！」  
スカラベは黄金虫のことだ。

ベルはシガレットケースをポケットから取り出す。

「ハワード・カーター博士がエジプトでみつけたツタンカーメン王墓が身につけていた胸飾りにもそれはあったのよ。まあ、もつとも、今回の調査は？修道院遺跡？の現状を写真撮影したり、全体図を作成するといったアウトラインの報告が目的……だから、そんな立ち入ったところまでは踏み込めないでしょうけれどね」

くわえた煙草に火をつけ、はにかんだ笑みを浮かべた。

翌日、雨が上がった。バンガロウを出、薔薇のアーチをくぐって階段を降りたシナモンとベルが、バンガロウの外にでたとき声がした。

「ひ、姫様。大変なあ。死体が！」

雨あがりの河畔を巡回していた庭師と庭師の孫の声だった。

## 後記

多段式ロケットは、「慣性の法則」を利用し、飛んでいる親ロケットの推進力に乗せする形で、子ロケットが分離発射されて、標的を狙い撃ちするのだ。

スイーツマンがドアの部屋の把手を回した。

「奴がきましたよ、先輩」

「今だ中居」

「ファイト」

「一発」

「スイーツマンさん、郵便小包ですよ」

「じくろつさん」

がぐん。

スイーツマンが、開けかけた扉を開いたとき、のびた猫の佐藤氏と犬の中居氏が床に突っ伏していた。犬の背から跳び上がった猫は扉に直撃し、犬は勢い余って止まりきれずにやはり扉に激突したようだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2349m/>

---

伯爵令嬢シナモン 第3部 「修道院島」

2011年10月10日13時37分発行